連合赤軍総括に向けて　その Ⅳ

意見陳述

革命左派の闘いから新党樹立をめざした党建設の闘い

＝永田洋子＝

意見陳述　目次

一、はじめに……二
二、「共産主義化」……二
三、早岐さん、向山君の粛清と山岳根拠地主義……三
四、新党と「新党」……七
五、「共産主義化」「新党」の敗北と破算の不可避性――「共産主義化」の否定と「共産主義化」との闘いの必要……九
六、赤軍派と革命左派の止揚……一一
七、政治路線確立の闘いとその曖昧化……一三
八、ファシズム思想の形成と一二名の同志の粛清……一八
九、一二名の同志はプロレタリア革命派である……二〇
一〇、おわりに……二一

革命左派の闘いから新党樹立をめざした党建設の闘い

〈一〉我々の闘いは党建設の闘いである……二三
〈二〉六九年の国際、国内階級闘争の激動と革命左派の誕生……二四
〈三〉革命左派の闘いと政治ゲリラ闘争……三三
①革命左派の誕生から九・三、四愛知訪ソ訪米実力阻止闘争まで……三三
②一一月佐藤訪米実力阻止闘争まで……三五
〈四〉「解放の旗」七号……三七
①一一月佐藤訪米実力阻止闘争の総括と革命左派の限界・問題点……三七
②日韓決戦論のMLとその混迷……三九
③警鐘……四三
④警鐘と日本資本主義の高度成長と婦人解放運動……四六
⑤六七年の警鐘とML……五〇
⑥神奈川左派と反米愛国路線とMLとの分派闘争……五五
⑦革命左派と「解放の旗」七号……五八

意見陳述

一、はじめに

革命左派（神）から離党したこと、赤軍派のプロレタリア革命派の立場にたって「新党」の敗北を止揚せんとし、連赤敗北、同志粛清の正しい総括の下にプロレタリア革命主義の旗を高く掲げ、建党建軍を堅持し、前進する決意であることをまず最初に明らかにしておきます。七一年情勢の中で我々が切り拓き、直面した階級闘争の厳しい段階と厳しい主体変革にたいして、米日帝国主義、資本家階級と闘う階級闘争に対決する思想や綱領、そしてこの核心であるマルクス・レーニンの資本主義批判を獲得し、マルクス・レーニン主義の社会主義革命の思想、政治路線をうち固めなければならず、正しい立場・方法・観点から改めて新党を樹立していくことは連赤公判闘争にとっても不可欠なことです。

連赤敗北、同志粛清の正しい総括は七〇年代革命勢力、新しい労働運動の波と固く堅く団結し、プロレタリア革命戦争への転換をなしとげ、プロレタリア党建設の闘いを決定的に飛躍させ、我々の連赤公判闘争を前進させるものです。連赤敗北、同志粛清故に逮捕され、現在においてはなし崩しファシズムと保安処分のアウシュヴィッツ的獄中管理政策への転換を意味する、東京拘置所が新設したいわゆる自殺防止房、実際には自殺促進房にぶちこまれ、この階級的法廷にたたされている我々は「新党」全体の決定的誤りと萌芽的部分的正しさを把え、生涯共産主義をめざして真摯に真剣に闘うべき立場にあります。この立場にたって、公判闘争を「内乱罪適用要求」の下に大規模に前進させ、自殺促進房撤廃の闘いも前進させるつもりです。

二、「共産主義化」

一四名の革命的な同志を粛清した過程は、私自身の内にあっては軍事一点ばりの観点、官僚主義、大衆遊離の作風、主観主義、個人主義思想を助長させ、確立していったものである。ブルジョア階級の世界観、方法論にもとづいている。この軍事一点ばりの観点、官僚主義、大衆遊離の作風、主観主義、個人主義思想を、粛清する過程で私は反省しようとはしていない。そればかりでなく、階級的思想性、闘う姿勢、政治作風、規律にマルクス・レーニン主義でもってたえられなかった指導部であった私は、同志にたいし、ブルジョア思想、諸小ブル思想、更にはファシズム思想をおしつけ、階級

闘争の厳しい段階と主体変革の厳しさにたいし乗りきろうとしたといわなければならない。同志を粛清した思想がファシズム思想であると私自身、当時わかっていない。しかし、このファシズム思想を私はおしすすめているのである。そして、このファシズム思想は同志たちの有していたプロレタリア革命戦争への萌芽を先取りして圧しつぶし尽しているのである。早岐さん、向山君を非常に安易に粛清してしまったこと、そして、この粛清を誤りとして自己批判しなかったし、できなかったことは、以後の一二名の粛清と連合赤軍「新党」の敗北の道をきりひらいたものである。更に、同志にたいする暴力、すなわち反動的暴力以外でないこの暴力と結びついた「共産主義化」は一二名の粛清と連合赤軍、「新党」の敗北の道を文字通り必然にしたものである。早岐さん、向山君の粛清後、私はこの粛清を誤りとして考えることはできなかったし考えなかった。このような粛清を再びしないですむようにしたいと思い、どうしても建党建軍の闘いの飛躍をかちとろうとしたのである。「共産主義化」にたいしては非常に大切なものだと思い、党建設の中心環だと考え、「共産主義化」をかちとることによって建党建軍の闘いの飛躍をかちとろうと思ったのである。マルクスの「共産主義とは永遠の理想や基準ではなく現実の実践である」や、毛沢東が赤軍創設の当初、すなわち秋収蜂起の闘いを経、井岡山の闘いにいたる頃、三大規律をさだめ、二八年の夏には六項注意をかかげ、以後、第二次国内革命戦争の時期にいくらかあらためさだめた三大規律、八項注意を「共産主義化」と結びつけ「共産主義化」を建党建軍の活動に重要な内容をなすものだと考えたのである。

三大規律は、いっさいの行動に従う、大衆のものは針一本、糸一すじもとらない、いっさいのろ獲品は公けのものにするであり、八項注意は、言葉づかいはおだやかに、売り買いは公正に、借りたものは返す、こわれたものは弁償する、人をなぐったりののしったりしない、農作物をあらさない、婦人をからかわない、捕虜を虐待しないである。この三大規律、八項注意は中国労農赤軍の政治工作の重要な内容をなしたものであり、人民軍隊の建設、軍隊内部の関係の正しい処理、人民大衆との団結、捕虜にたいする人民軍隊の正しい政策の確立などの面で偉大な役割をはたしたのである。我々の「共産主義化」は早岐さん、向山君の粛清をはっきり合理化し、一二名を粛清し、連合赤軍、「新党」を敗北させた体質である。マルクスの言葉や三大規律、八項注意をマルクス・レーニン主義の正しい継承と発展の中で、プロレタリア革命戦争への転換をなしきる中で把えるのではなく、逆に、マルクスの言葉や三大規律・八項注意を「共産主義化」の合理化のために悪用していたといわなければならない。

三、早岐さん、向山君の粛清と山岳根拠地主義

ここで、一二名の粛清、連合赤軍・「新党」の敗北をきりひらいた早岐さん、向山君の粛清を考えてみたい。早岐さん、向山君は銃を軸にした遊撃戦、せん滅戦を志向し、建軍の闘いに参加し、建軍の闘いを前進させようと山岳ベースに結集したのである。政治警察の超重包囲攻撃から逃げだし、山岳に後退していた我々の山岳ベースには精神主義の修養運動が芽ばえざるを得なかった。この精神主義の修養運動に疑問をいだき、向山君が、そして早岐さんが山岳ベ

ースからはなれていったのである。このことは階級と階級闘争からの召還を意味し、このことを「左」翼日和見主義的に正当化した山岳ベースに対する鋭い警鐘であった。山岳ベースからはなれることによって、山岳ベースを批判した早岐さん、向山君は革命左派の中で革命的な側面をもっていたのであり、正しい階級意識を有していたのである。

山岳ベースの設定は二・一七銃奪取闘争後の消極的防禦の延長線上にあるものである。我々は二・一七闘争後、この銃を使って直ちに戦闘をすべく、ある戦闘を考えていた。二・一七闘争後、直ちにひかれた一都六県の検問体制、アパートローラー作戦、そして全国指名手配、全国一斉捜査等々にたいし、我々は消極的防禦に終始せざるをえなかった。ある戦闘は断念せざるをえなかった。銃を守り我々を守り、本格的な統一戦線の闘いの開始を希求した。そして、銃を握りしめる中で人民の銃の持つ意味を問い、思想と政治の飛躍の希求は強いものであった。ある戦闘のための二・一七闘争ではなかったこと、二・一七闘争それ自体が我々に決定的なものとして思想と政治の飛躍を要求していくことを知っていった。しかし、この思想、政治の問われた飛躍にたいし、真正面からとりくむことができなかった。この時、我々は真正面からとりくむべきであった。

我々革左は戦術左翼的、小ブル革命主義的に、いわゆる毛派、毛沢東教条主義からの脱皮を追求し、党建設をめざしたのであり、思想、政治、理論、組織、戦術の全体系の検証をせぬまま前進してきたのである。左派から革命左派、そして木下派との分派闘争の過程は、反米愛国路線の具体的適用をめぐって争ったものであり、政治路線そのものをめぐって争ったものではない。すなわち、実力闘争を支持し、全国政治新聞の発行に着手するのか否か、政治ゲリラ闘争を闘うのか否か、の争いであった。六九年暮の、木下派との分派闘争こそ象徴的である。今後も、政治ゲリラ闘争を闘うという我々に対して、直ちに木下派が除名を要求しているのである。当時、柴野君が全国指名手配されており、我々自身も昼夜をわかたず政治警察から尾行されていたのであるが、この弾圧を木下派は恐れ、理論闘争、党派闘争を徹底して行なおうとはしなかったし、我々も理論闘争、党派闘争を要求していない。理論闘争、党派闘争を回避し――この回避は政治警察の弾圧があることを理由に、より徹底されたのであるが――政治闘争を闘うのか否かが唯一の分岐点であった。我々、革左は実力闘争を闘い、政治ゲリラ闘争を闘い、戦術左翼的小ブル革命主義的に前進してきたのである。だからこそ我々は、銃を握りしめたとき、戦術左翼的、小ブル革命主義的戦闘団主義を真に克服し、思想・政治の飛躍を要求されたのであり、政治警察の超重包囲攻撃の中で一定程度、この必要に気付いていったのである。しかし、戦闘団主義故に真正面からとりくむことができなかった。それで我々は二・一七闘争後から山岳ベースの設定までに様々な意見、混乱を生んでいるのである。

二・一七闘争後のおもいがけない程の政治警察による超重包囲攻撃と、これにたいする我々の消極的防禦の中で、軍のある部分から、奪取した銃をただちに赤軍派に渡すべきだ、赤軍派にいきたい、ただちに銃撃戦をしたい等の発言があったし、半合法の部分からは消極的防禦に疑問を抱き、京浜安保共闘赤軍派をつくろうという発言や、これにたいする共感があったとのことである。我々は消極的防禦の中で、①海外根拠地、海外亡命を考え、そこで銃の訓練と共に

思想、政治の党としての飛躍を希求し、②一方、新左翼のML、あるいはマル戦→警鐘→左派→革左→木下派との分派闘争→二・一七闘争の過程を総括しようととりくみ、しかしはたせず中途半端にし、③更に赤軍派との支持、支援の下での革命戦争派としての前進を考えていったのである。海外根拠地にたいして半合法の部分と赤軍派から反対と批判があった。そして、軍の部分からも直ちに前段階武装蜂起を準備しようという方針や、三里塚で爆弾闘争をという方針がだされた。これらは、消極的防禦と海外根拠地にたいする痛烈な批判であった。だが、この消極的防禦の過程や海外根拠地の思考には、党としての思想、政治の飛躍の希求が内包されているという一面があり、反米愛国路線の止揚方向を求めていっている一面があった。このような中で我々は銃の訓練としての海外根拠地の思考を自己批判しとりけし、思想、政治の飛躍をかちとるべく銃を軸にした党建設をかかげ、銃を軸にした遊撃戦、せん滅戦をめざし、そして爆弾闘争をも闘おうとしたのである。同時に海外根拠地にいき、学ぶことも追求しようとしていたし、赤軍派との支持、支援を進めようとも考えていた。そして、山岳ベースを設定した。我々が山岳ベースを設定したのは、文字通り都市にふみとどまることができなかったからである。都市にふみとどまることができなかったことが、二・一七闘争以後から山岳ベースの設定までの間の様々な意見や混乱を生んでいたのである。赤軍派が都市にふみとどまることができたのは「市民的政治的闘争の時代の終えんと、反帝闘争の時代の到来を結論して、これに向けて全戦線を再編する反帝統一戦線の陣型の確立を主張する」という六四年の第三期論の下での労働運動の組織化と、反帝統一戦線の闘いがあり、その後の全共闘運動があり、小ブル革命勢力に依拠していたからである。この依拠こそ都市にとどまれたものであり、七〇年代革命勢力との結合の道をきり拓いていくものであった。事実、下層プロレタリアートとの結合をめざしていた第一ゲリラ隊が、新しい経験、新しい感覚、体質をもって生まれていたのである。これにたいし、我々革命左派は小ブル革命勢力に直接依拠していなかったといわなければなるまい。我々は都市にふみとどまろうと手当りしだい、実に血と涙のにじむような模索をしたのである。小ブル革命勢力から七〇年代革命勢力に依拠基盤をかえていかなければならない、という明確な意識性をもつのでなく、労働者階級に依拠しなければならないという一般的に正しい命題の下に、無媒介にプロレタリアートに依拠しようとしたり、マルクス主義経済学・資本主義批判をもって諸階級、諸階層を分析するのでなく、友人、知人、様々な所からひきだされる関係を掘りだし、依拠しようとし、このデタラメな依拠から逆に反米愛国路線の正当性、すなわち生産手段を私有し、他人労働を搾取している資本家に、原則的にプロレタリアート独裁に敵対する性格をもっている敵であり、敵階級であると規定し、その上で敵階級政策の中の中立化政策が非常に重要であると考えるのでなく、資本家階級の一部も大いに同盟軍たりうると考え、この正当性をメチャクチャにおしすすめているのである。革命左派が直接依拠する小ブル革命勢力をほとんど持っていなかったこと。そして、デタラメな、しかし必死の模索から反米愛国路線を問い直すどころか、逆に正当化したために都市にふみとどまることができなかったと考える。広範に意識的に七〇年代革命勢力に依拠しようと真剣になれば、我々革命左派も都市にふみとどまることができ、政治警察の前代未聞の弾圧にひざまづいて

しまうことはなかったのである。

一方、消極的防禦の際、我々自身が工場に入り工場労働者と結合することを考え、又半合法の部分に工場労働者と結合することを方針としてだしたことがあるが、これらはあまりに無媒介、一般的であったため実行されなかったし、方針はうけいれられなかった。都市にふみとどまることができず、我々は山岳ベースを設定していった。同時に軍の量的、質的発展の願望の下に、又政治警察の前代未聞の弾圧の下での半合法の方針が定まらない中で、半合法の大部分を山岳ベースに結集させている。どこどこの公園で銃声に似た音がしたというだけで、戒厳体制がひかれる程の超重包囲攻撃の中でも山岳では銃の訓練ができることを改めて発見していった。我々は当初、山岳を戦術基地として利用する内容で考えていた。山岳で銃の訓練をし討論を―、一方で都市にふみとどまるべく革命勢力との結合を追求すべく起点にし、更に海外根拠地にいくことも考えていた。一方、当時すなわち七一年五月、六月赤軍派の人が次々と逮捕されていった。このニュースをラジオや新聞で聞いたりみたりすると胸がドキッとし、何ともいえない気持になり、頭をかかえこむ思いであった。これは同じように指名手配になり、前進しようと必死に模索している者でないとわからないかもしれない。このニュースを積み重ねる中で山岳ベースを設定したことを正しいことのように思っていっている。このような中で向山君、そして早岐さんの山岳からはなれるという行動があったのである。早岐さんも向山君も、山岳からはなれる前に我々にはなれたい旨、話しているのである。我々はこの希望をうけいれることはできなかった。政治警察の超重包囲攻撃から山岳を知っている早岐さん、向山君を山岳からはなれて守ることはできないという観念と、山岳で飛躍する以外ないという思いがあったからである。向山君が山岳からはなれ、そして早岐さんもはなれていった。とりわけ早岐さんは山の服装や登山靴で山岳からはなれるようなことはすまいとし、事実そうしているのである。向山君が山岳からはなれても我々は割とのんきであった。ただちに山岳ベースを移動させるということもなかった。政治的方向性の一致、単一新党の方向性をめざし、日本革命戦争を発展させようと革命左派と赤軍派は統一赤軍の結成を確認した。この確認直後、せん滅戦の準備活動中いなくなったこと、一方山岳からはなれた向山君が登山服のまま京浜安保共闘専属の刑事が出入りする親戚の家にいったこと、親しい人に山岳にいったことをしゃべっていること等を同時に聞き、危機感をもっていくのである。この時、たった一人の通敵分子の輩出すらもが山岳ベースを全滅させることを知るのである。そして統一赤軍の結成の妨害になることを心配した。我々はこの時から山岳ベースを守る、銃を守る、山岳で頑張るというように階級と階級闘争からの召還を意味する山岳根拠地主義を確立していくのである。確立していった山岳根拠地主義は必らず銃を軸にした遊撃戦、せん滅戦を闘おうという戦闘団主義をますます色濃くさせていったものである。戦術基地として利用する内容で考えていた山岳ベースを山岳根拠地主義にかえていったこの過程には、中国の人民戦争の山岳根拠地、解放区のイメージに依拠していったといわなければならない。中国の人民戦争の山岳根拠地、解放区は周囲の農民の階級闘争の中心に位置し、これにしっかり結びついて発展成長したものであり、階級闘争の政治的、経済的、社会的、軍事的中心に位置していたのである。これにたいし、先進国日本において根拠

地を山岳に求めることは階級と階級闘争からの完全な召還を意味し、小ブル革命主義の反権力主義、「左」翼日和見主義の極限形態を意味するものであった。山岳ベースにたいし鋭い警鐘を乱打した早岐さん、向山君の山岳をはなれるという行動にたいして、我々は山岳ベースを正しく清算するのでなく、早岐さん、向山君を山岳にひきもどそうとしている。その後の向山君は山岳からはなれた所から小説をかきはじめていること、親戚の家で刑事と酒をのみかわしスリルを感じていること、早岐さんは友人に山岳からはなれてせいせいした、アルバイト先で山岳にいっていた、とそれぞれ語っていること等していわゆる報告を聞く。この報告がどのような方法で調べたものなのか、又誤りはないのか、等々に注意を払うことは一切せず、山岳にひきもどすことなどできないと考え非常に安易に粛清を行っているのである。早岐さん、向山君のこの報告が本当なのか否か、わからないし、むしろ誇張等々があり、全くの歪曲になっているのではないかと疑わなければならないと思う。山岳を離れてせいせいしたという言葉こそ都市にふみとどまれず、山岳に後退していったものとして真剣に考えなければならないものであったが、当時私はこの言葉にかなりの怒りをもっている。山岳をはなれてせいせいしたという表現できない、すなわち、山岳ベースを正面から批判できず、山岳ベースには自分はおることができないと思い、山岳を黙ってはなれざるをえなかった闘う主体の相対的弱点を絶対化し、敵対矛盾化して把え、加えて山岳ベースをけなしたということで怒っていっているのである。しかし、これはまちがいなく事実であると思うが、早岐さんは山岳にもどるつもりはないが、半合法の闘いや合法の闘い、あるいはカンパ等なら、一定程度するといっているのである。早岐さん、向山君の粛清は半封建、半植民地の中国の革命戦争と先進国日本の革命戦争を区別せず、中国革命のアナロジー化や中国革命のイメージに依拠し、階級、階級戦争からの召還を合理化していた山岳ベース、山岳根拠地主義の下ですすめたものである。この粛清後、我々はこの粛清を非常に曖昧にウヤムヤにしていった。そして、精神主義の修養運動は自己転回する如くすすみ、山岳根拠地主義を明確にうみだしていっているのである。これこそ、一二名の粛清への軌道をすえてしまったものである。

四、新党と「新党」

早岐さん、向山君の粛清をかかえながらも我々は、マルクス・レーニン主義の正しい継承と発展をめざし、日本革命戦争の発展、プロレタリア革命戦争への転換をめざしていたのである。赤軍派と革命左派の止揚をめざしたのであり、歴史的には、日本共産党の現代修正主義化、修正主義の確立をとおしたプロレタリア党不在という主体的条件の中で、小ブル学生勢力が中心になり、階級闘争の全体を牽引し、党建設を担おうとしてきた反スタトロッキズムと、日韓決戦、なぎさ帝国主義論の破産、中国プロレタリア文化大革命、中ソ論争、日本共産党党内闘争、党派闘争に規定され、発生し、その後の六九年の国際、国内階級闘争の激動の中で、党のための闘いと党としての闘いを結合し、党建設を担おうとした毛沢東教条主義の同時相互止揚をめざすものであった。この止揚方向がいかに不十分、不徹底、曖昧であったとしても――文字通り不十分不徹底、曖昧であったが――この止揚方向は厳然と存在していたし、この止揚は思

想闘争、思想問題を中心にしながら、マルクス・レーニンの資本主義批判を獲得しつつ、プロレタリア革命戦争の転換をかちとり、プロレタリア思想とプロレタリア党を獲得していくものであり、正しいものであった。六〇年代の階級闘争を経て、毛沢東思想と革命戦争の地平で、銃をにぎりしめた地平で、はじめて赤軍派と革命左派の止揚をかちとったのであり、「新党」は赤軍派と革命左派の野合ではないと榛名ベースで我々は何度くりかえして強調したであろうか。我々はこの止揚方向を明確にかちとらないまま、いいかえれば新党の入口をみつけ、この入口へ歩いていく前に「新党」を宣言していったのである。我々は新党の入口まで一歩一歩地道に歩いていく努力をしなかった。そして、反スタ・トロッキズムと毛沢東教条主義の同時相互止揚の核心である思想闘争、思想問題にプロレタリアートに依拠するマルクス・レーニン主義でもってこたえられず、それ故、自己のブルジョア思想、小ブル思想を絶対化し、更にはファシズム思想を形成し、これを「共産主義化」と称し、乗りきり新党の入口にまで歩いたつもりになっているのである。一二名の同志は反スタ・トロッキズムと毛沢東教条主義の同時相互止揚をめざし、真のプロレタリア思想とプロレタリア党をのぞみ、内乱とプロレタリア革命戦争をのぞんでいたのである。そして、ブルジョア思想、小ブル思想、ファシズム思想の「共産主義化」に批判的傾向を有していった部分である。従って、もっとも革命的な同志であり、我々は「新党」を否定し、この一二名の立場にたち、新党をあらためて正しい立場・方法・観点から樹立していかなければならない。

判事や検事が我々を裁こうとするなら、一四名の同志の立場にたたなければならず、ブルジョア思想、小ブル思想、そしてファシズム思想を裁かなければならず、更には徹底して軍国主義、資本家供を裁かなければならない。しかしここは階級法廷である。判事や検事はところてん式に我々を裁き、それを通して一四名の同志を裁き、「はい、一丁あがり」としようとしているのである。一二名の同志と我々の間には「共産主義化」をめぐって党内闘争があったこと、このことを判事や検事はみようとしないし、みることはできない。ブルジョア思想、小ブル思想、ファシズム思想に批判的傾向を有していった中で、一四名の同志はプロレタリア革命派として形成されていく部分だったのである。裁判長は昨年の夏、裁判所職員の労働条件の悪化、労働強化を気にしていたが、社会主義中国ではプロレタリア文化大革命後、裁判がひらかれていないこと、社会主義中国が人民を裁くということはありえないという考えの下に、問題のある思想にたいしては徹底して話し合いで改造していっていること。このことを裁判長に進呈したい。何故に日本においては裁判所が悲鳴をあげる程裁判が山程あり、社会主義中国にはないのか!! 我々は一四名を断罪し、粛清した思想、ブルジョア思想、小ブル思想、ファシズム思想を徹底して糾弾しなければならず、そして軍国主義、資本家供を告発し、糾弾しつくさぬばならない。ここが階級法廷である以上、一四名を断罪し粛清したことにたいし、自ら苦闘し、一四名の立場にたちマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の深い獲得の下に、プロレタリア革命戦争へ転換する中心環である思想闘争、思想問題にいどみ、一歩一歩解決し、プロレタリア革命主義の旗を高くかかげて、米日帝国主義と闘い抜いていく以外の何物もない。いかなることがあろうと一四名の同志の立場にたつことができない判事や検事は、我々を裁くことはできない。逆に判事や検事は一四

名の同志に裁かるべきである。我々は公判闘争を通してプロレタリア党建設の闘いの一環として正しい総括を樹立し、獲得してゆくものである。あらためて正しい立場・方法・観点から新党を樹立しなければならない我々は「新党」を否定し「共産主義化」を否定する。徹底して否定する。

五、「共産主義化」「新党」の敗北と破算の不可避性——「共産主義化」の否定と「共産主義化」との闘いの必要性

七二年二月一五日、二・一七闘争直後と同規模の、すなわち戦後最大規模の全国一斉捜査が行われたこと、榛名ベースが政治警察に発見されたことを知る。一刻も早く山岳の皆と合流し、この危機を突破しようと一五日夜、榛名ベースにいく高崎を通らず、遠まわりをして夜行に夜行をのりついで二月一六日の昼少し前、妙義山の洞くつにいたる山道のまじかに達した。緊張に緊張を重ねてここに至り、一六日の朝刊に何もでていなかったことも合わさり、安堵したとたん、三人の警察官の乗った自動車とすれちがった。自動車の窓から首をだし「どこにいくのですか、いき止まりですよ」と警官は声をかけた。しかし車から降りはしなかった。だが、我々は森君と私の間で方針がちがっていた。私はこの場をきりぬけ、この包囲網を皆に知らせ、この危機を皆と突破することを考えていた。森君は直ちにセン滅戦を行うことを考えていた。この違いが警官に不信をもたれた。私は車とすれ違いながら「そうですか、行きどまりまでいってみます」といい、そのまま歩き、警官の様子を見て、立ちどまっていた森君を歩くようにうながしたのである。しばらくして方向をかえ車は我々をおいかけてきた。一人の警官がおり、二人目がおりてきた。今度は職質である。この職質にたいし、行きすぎだと抗議し、戻ることをいい職質は終った。車はもう一度方向をかえ走りさったのである。この後、又我々の方針は異った。私は書いてある地図に従って、すぐ皆の所に走り帰ること、このことがどうしても危険なら、都市にもどることを考え、皆の所に一目散でたどりつくことを主張した。森君はどちらにも猛反対であり、直ちに山の中に入ること、そしてそれから皆の所にいくこと、ともかく山の中に逃げこむことを主張し、この主張の下に行動していった。知らない山の中に入り、そこから皆の所にいくことなどできない。職質に疑問をもって包囲網をひく時間迄には皆の所にいける等の私の主張にたいし、包囲網は直ちにひかれること、知らない山の中から皆の所になんとしても行くのだという森君の主張と行動があったのである。私はこの「なんとしても行くのだ」という言葉に同意し、そうしなければならないと思ったのである。この非科学的な精神主義のみの「なんとしても行くのだ」こそ「共産主義化」の実体の一部を表わしている。又、この破算もすぐ我々は経験したのである。

暗号にしておいた地図は職質後、頭に入れすぐにのみこんだが、あろうことか、唯一の所持品の大切なマッチまで雪の中にうずめてしまったのである。やみくもに山の中に入っていったが、雪は深く膝小僧まで足がつかり、背中に雪が入りながら、ともかく山の頂きにでようとした。そして皆のいる所を見当つけ、又包囲網の状況をみようとしたのである。その間、ヘリコプターの音がしはじめ、かなり低空をとびだす。我々は岩の下に身をふせたが、このヘリコプ

ターはすぐになくなり、我々の職質からヘリコプターが飛んだのではないらしいと判断した。やっとの思いで山頂につき、山道に達する前の車の走る道路は全体的にみることができた。これは一時半頃であり、包囲網はひかれていない様だった。一方、皆のいる所は全然見当がつかなかった。これは当り前である。一度もいったことのない山であり、正確な地図も磁石ももっていないのであるから。私は包囲網がひかれていない様子を力説し、入りこんだ山道をもどり、頭に入れた地図どおりに皆の所にいくことを主張し合意した。しかし、自分達の歩いた雪の跡をさがし、もと来た道を帰るのは大変だった。一度通っただけの誰もふみいったことのない雪の跡は、なかなかわかりにくいものである。車の走る道路にでる山道の入口にでたのは四時すぎていた。この間ヘリコプターの音はしていない。既に暗くなりはじめていた。私は紙でこよりをつくり、その火の明りで皆の所にいくことがその場合最善であることを主張した。懐中電燈もなにもない時、紙でこよりをつくり、その火の明りで山道を歩き、目的地についた経験が我々の中にあったからである。しかし、この時マッチはなかったのである。こうなった以上、夜明けを待って出発する以外なかった。洞くつにいたる山道の入口を確認していたら雪明りで歩くことも可能であったが、我々はこの山道を発見する寸前で職質にかかっており、この山道を確認していなかったからである。

夜明けを待つ間、車の走る道路に神経を集中させながら職質であわててしまい「何としても行くのだ」の言葉の下にやみくもに山の中に入ってしまったこと。山の中をただ必死な思いでさまよった中で頭に浮んだのは一四名の粛清であったこと等を考え続けた。そして一刻も早く皆の所に行き、この危機を突破しょうと考えていた。夜明けと同時に、洞くつの皆のいるであろう所にひた走った。この山道に非常に新しい足跡が沢山あったので、もしかしたら洞くつにもういないかもしれないと思った。洞くつは非常に急いでたちさった様子を残していた。我々も直ちにたちさろうとした。その時、上空からヘリコプターの音がし、山道から警察犬の声と無線機を通じて、機動隊の歩いてくる音が手にとるようにわかった。我々はできる限り、せん滅戦を闘う以外なかった。私はこのことだけを考えていた。そして森君の「もう生きては皆と会えないな」という言葉を否定していた。この「もう生きては皆と会えないな」という言葉こそ、我々の「共産主義化」の基準からすれば、日和見主義、敗北主義、投降主義ではないか。機動隊に我々が発見され、機動隊の銃口から銃弾が我々の耳もとをとびかい、それでも機動隊に向っていった私は体中、とりわけナイフを握りしめていた手の疵を警棒でめったうちにされ、あっけなく逮捕された。それでもナイフを私は握りしめていた。機動隊は握りしめていたナイフを奪い去ろうと必死であった。四、五人の機動隊に手をこじあけられ、奪い去られた時、「これだけはいやだ、これは銃と同じなんだから」といっている。我々の「共産主義化」の下ではんなことをいう「余裕」があったら、まだせん滅戦を考えるべきではなかったのか。

「何としてでも行くのだ」という言葉が我々を支配しなければ――そのためには「共産主義化」の誤りに気づき、真剣な自己批判をなしていかなければならなかったが――時間的には我々は洞くつからたち去ろうとしていた皆に合流することが出来たのであり、奥沢君や杉崎さんの一六日の逮捕もなかったかもしれない。「共産主義

化」「新党」の敗北、破算は不可避だったのである。しかしながら、敵権力と直接対峙し、敵権力と果敢に闘い抜こうとする時、「共産主義化」を否定し、「共産主義化」と闘うことが不可欠であること、そして、無意識ではあったが、我々自身敵権力と対峙した時、いくらかは、ほんの少しであるが「共産主義化」と闘っていることをいっておきたい。だから、あの山道の入口での職質をかわすことができたのであり、「何としても行くのだ」の超現実的なウルトラ精神主義の下に、皆の所にいけないことを知っていくのである。妙義山の洞くつから山越え、そして浅間山荘にいたり、銃撃戦を闘い抜いた全ての闘いは「共産主義化」を否定し「共産主義化」と闘い科学性を堅持し抜こうとするものであったと考える。これこそ、一四名の立場にたち、あらためて正しい立場・方法・観点から新党を樹立していく方向をもっていたといえるのである。

六、赤軍派と革命左派の止揚

我々は赤軍派と革命左派の止揚をめざしたのである。歴史的にはマルクス・レーニン主義、毛沢東思想と革命戦争の地平で、反スタ・トロッキズムと毛沢東教条主義の同時相互止揚をめざしたのであり、「新党」は赤軍派と革命左派の野合ではないと考え、新しい闘いの力と決意をもったのである。だが、この止揚の環である思想闘争、思想問題の位置ずけを一定程度正しくとらえ、この思想闘争、思想問題に挑戦したのであるが、指導部であった我々はマルクス・レーニン主義でもってこたえていくことができず敗北、破産の不可避性を有していた「共産主義化」を絶対化していったのである。だから、我々が赤軍派と革命左派の野合ではなく止揚である、この止揚は六〇年代の階級闘争を経てはじめてかちとったものである、とくりかえして強調したことは、この止揚方向を我々全員がめざしていたということを示している、と同時にこの止揚を真に獲得する前進の道を歩めなかったという事実を内包している。

プロレタリア革命戦争の思想闘争、思想問題に挑戦し、赤軍派と革命左派の止揚方向をマルクス・レーニン主義の正しい継承と発展として獲得しなければならなかった。我々はこのことを七一年情勢の中で決定的ギリギリなものとして問われたのである。

（イ）七一年情勢は、国際的には世界革命戦争の持久的対峙戦への転換期であった。国内的には、六九年の佐藤訪米実力阻止闘争と七〇年安保闘争の大昂揚を経ての、革命情勢の過渡の更なる成熟期への進展期であった。国際的、国内的経済、政治、階級構造の転換が、自然発生的なプロレタリア的革命勢力を試練にかけ、プロレタリア革命戦争への転換を要求したのである。

（ロ）自然発生的なプロレタリア的革命勢力、すなわち小ブルジョア的革命勢力の階級基盤は小ブルジョア学生勢力が中心であった。プロレタリア、その他の階層を内実とする〝反戦派労働者〟も結集していたが。この国際的、国内的経済、政治、階級構造の転換はますます民族解放闘争との連帯を要求し、基幹産業プロレタリアの総体を左傾化させ、国鉄や下層プロレタリアートを突出させ、農民、漁民を階級闘争の舞台に登場させ、部落解放闘争、在日アジア人問題を全面化させ、地域住民闘争、婦人解放闘争が発展し、七〇年代革命勢力を登場させた。革命的左翼はこの七〇年代革命勢力と結合し、階級形成、自己変革をとおして、プロレタリア革命戦争の転換

をかちとっていかなければならなかった。

（ハ）このような階級闘争の構造的転換の中で、小ブルジョア革命勢力と革命闘争は必然的に分解した。一つは従来の小ブル革命勢力の自然発生的戦闘性を絶対化し、小ブル革命主義を徹底化していく部分である。この部分は小ブル革命勢力、それ自体が分解しているが故に依拠する階層を持たず、突出するか、独自な小ブル戦闘集団に変質せざるを得ない。第二には、階級闘争の転換と小ブル革命主義の限界性に気付きつつ、更に「小ブル性の克服とプロレタリア化やプロレタリア党」をかかげつつ、七〇年代革命勢力の革命性、戦闘性を正しく把えられず「小ブル性の克服」を看板に、過去の闘いを清算し、合法的な労働運動主義に転落していったり、ブル転していったり、講座マルクス主義、合法マルクス主義に変質していったりした部分である。第三には、階級闘争の転換と小ブル革命主義の限界性を理解し、七〇年代革命勢力を資本主義批判を武器に、マルクス・レーニン主義でもって理解し結合し、同時にこのことをもって自己改造をかちとろうとするプロレタリア革命派を形成した。

（ニ）この小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への転換の核心は、階級的思想性、思想闘争である。資本主義批判を軸とするマルクス・レーニン主義の獲得の深化を通じ、既存のブルジョア思想、諸小ブル思想、非マルクス主義＝非プロレタリア的な、ブルジョア的、小ブル的思想を思想闘争をもって克服し、日本資本主義、現代世界批判のプロレタリア的＝マルクス・レーニン主義的貫徹が問われた。

以上の諸点がある中で、我々は赤軍派と革命左派の止揚をめざしていたのであり、これは階級闘争の転換にこたえていくものであり、正しいものであった。この止揚の内容には、小ブル革命主義の路線の分解と、そのプロレタリア革命路線への根本的止揚、再編の要に革命的プロレタリアの思想的立場を獲得しようとする、資本主義批判を軸とするマルクス・レーニン主義の獲得として内実される、思想闘争が存在していること、このことを正しく位置づけ、この思想闘争をもって、これまでの小ブル革命主義の全体系の思想、政治、理論、組織、戦術、作風の検証と転換の下に、現代日本資本主義批判、現代過渡期世界批判の総括としての日本・世界革命綱領と戦略に具体化する政治路線の確立の闘いが存在していたのである。

六九年来の武装闘争の追求の中で、すなわちこの武装闘争は小ブル革命主義の戦闘性、革命性に依拠していたのであるが、この武装闘争に真剣になればなる程、七一年情勢の階級闘争の新段階と合わさり、階級的思想性、思想闘争が問われ、このことに気づき、更に思想、政治、理論の検証の必要にも気づいていったのである。だからこそ、セクト的対応に終始するのでない赤軍派と革命左派の支持、支援の道を断固として歩んだし、共にプロレタリア党建設の道を歩もうとしたのである。ブルジョアマスコミや、更には奥沢君たちの論告求刑や判決文にも、世界革命の赤軍派と一国革命の革命左派として観念的なきめつけをし、赤軍派と革命左派の野合を声を大にしてわめきたてているが、これは我々が階級的思想性、思想闘争に一歩もひきさがることが許されぬ如く鋭く直面していたこと、プロレタリア革命戦争への転換の必要という客観的情勢の中で、赤軍派と革命左派の革命的支持、支援の道があったことをおおい隠さんとしているものである。赤軍派と革命左派の革命的な支持、支援、赤軍派と革命左派の止揚による新党の客観的必要条件はあったのであ

る。

七、政治路線確立の闘いとその曖昧化

我々は以下のことを獲得していく必要があった。プロレタリア革命戦争に転換すべく、プロレタリア革命戦争を遂行する思想的、政治的原動力を獲得することであり、その物質化としての党建設であった。革命戦争の依拠基盤を分解しはじめた小ブル革命勢力から七〇年代革命勢力に移し、資本主義批判を軸とするマルクス・レーニン主義の立場、方法、観点でプロレタリア革命勢力を科学的、階級的に解明すること、プロレタリアートに依拠するマルクス・レーニン主義によって、初めてプロレタリア革命の思想的、政治的原動力を獲得できること、これによってブルジョア思想、小ブル思想を粉砕することとしてあった。また、レーニン死後のマルクス・レーニン主義の最高峰として毛沢東思想をとらえ、更に毛沢東思想を歴史的、包括的、全面的に獲得し、国際共産主義運動の正しい総括視点から、反スタ・トロッキズムの小ブル自由主義、無政府主義の側面や毛沢東教条主義の小ブル民主主義、小ブル民族主義的側面の「人民独裁――民族解放民主主義革命」の中国革命のアナロジー化と中国革命のイメージに依拠することを克服し、日本革命の路線――これは社会主義を準備する、政治的過渡期が存在する、反帝反米の社会主義革命であるが――この路線を革命戦争の遂行にみあって豊富化、発展させることとしてあった。これらの思想、政治問題を組織作風、規律問題として物質化すること。ブルジョア思想、小ブル思想を克服し、「左」右の日和見主義と両面で闘いつつ、自然成長的、戦術左翼的、戦闘団主義の党建設の路線を克服することとしてあった。戦術面では革命戦争を開始したからといって単純に機械的前進運動のみをとらず、情勢の変化に応じて無限の変化をとり、革命戦争路線を堅持しつつ、七一年情勢の中で党として転換する指導能力を問われるものとしてあった。

以上の内実を全面的に把えず、思想闘争をもってこれまでの思想と政治の飛躍と転換の下に、日本・世界革命綱領と戦略の具体化する政治路線の確立の闘いへ我々は進んでいこうとしたのである。だが、この政治路線の確立の闘いにおける思想闘争の占める大きな役割に驚き、幻惑し――この驚き、幻惑は赤軍派と革命左派の止揚内容を獲得しないまま、「新党」を宣言していってしまったものだが――そして、この思想闘争にこたえられぬまま、ブルジョア思想、小ブル思想を絶対化し、至上のものにし、このブルジョア思想、小ブル思想を全てのものにしていき、更には、ファシズム思想を形成し、政治路線の確立の闘いを中途挫折させたのである。

我々の進もうとした政治路線の獲得の闘いは、過渡期社会における「連続性と段階性の矛盾」「世界性と一国性の矛盾」の二重の矛盾を「二つの道の階級闘争」を通じて解決してゆく路線を確立を確認する観点にはっきり立つ必要があった。ロシア革命以後の「資本主義から社会主義への世界的規模での移行期」として存在する、現代過渡期世界は、資本主義とプロ独＝過渡期社会が長期にわたってたたかう複雑な世界革命戦争として存在し、一国からいくつかの「国家」へと除々に資本主義が打倒されながら展開されていく世界であり、一挙に、世界的に同時に、国際帝国主義の体制が打倒されるものでも、又、一国だけが切り離されたバラバラの、算術的総和と

しての世界革命でもなく、同時性や有機的単一性に規定されるものだということをはっきり確認する必要があった。そして、この観点からスタ・トロ論争や毛沢東思想の総括、国際共産主義運動の正しい総括、社会帝国主義批判等を獲得すること、又、各国の基本綱領と基本戦略を学ぶこと。社会帝国主義の実態的、理論的批判、闘争、毛沢東教条主義や反スタ・トロッキズムの偏向を克服すること等を通して、毛沢東思想の歴史的、全面的、包括的獲得が必要であった。日本資本主義の批判、諸階級、諸階層分析、国家権力の支配構造等を通しての、反帝反米の日本プロレタリア社会主義革命の基本綱領と戦略、及び当面の最小限綱領の獲得、反米民族解放民主主義革命の克服とトロッキー的「社会主義革命」の克服、これらを通しての、七〇年代革命勢力との結合の方向の獲得が必要であった。軍事至上主義の小ブル革命戦争路線や、受動的、待期主義的な蜂起路線の克服と、思想、政治路線の正しさと党建設の闘いを条件としての遊撃戦を含む恒常的内乱＝建軍、攻撃的蜂起の陣型の創出が必要であった。そして、体系的なマルクス・レーニン主義のプロレタリア世界観に基づく綱領と戦術に基づいて、組織を本質的に獲得すること。このプロレタリア世界観＝綱領、戦略の視点からの全ゆるブルジョア的諸偏向との徹底した闘いが必要であった。

これらの必要な作業を我々は行うことができなかった。それどころか、なりゆきまかせに行ったのである。又、「銃と共産主義化の党建設」の戦闘団主義から、これらの必要な作業に近づいており、これ故に、必要な作業にとりくんでいくことはできなかったのである。我々の行なった、ほんの少しの作業でさえ煮つめることなく、また全同志の前に十分に提起することもなかった。はなはだしくは、いわゆる総括を要求している同志には、これらの必要な作業に口をだしてはいけないとはっきりいってもいるのである。すなわち、これらの必要な作業の前に総括「共産主義化」をかちとる必要がある。だから、粛清を次々とおこす中で、我々自身も又、これらの必要な作業を放棄していっているのである。

必要な作業に我々は以下のように近づき、又、曖昧にしていったのである。

（イ）マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を真剣に徹底して学習しようという確認をしたこと。我々は、マルクスの三部作、コミンテルン・ドキュメント、プロレタリア文化大革命の資料をあの山岳で新たに購入したし、レーニン全集の購入も考えていた。

（ロ）国際共産主義運動を総括していく必要が語られ、スターリン問題についてはスターリンの全面肯定、全面否定は共に誤りであり、スターリン問題については慎重に対処していこうとした。そして、「国際共産主義運動の総路線についての論戦」の中の人民日報、紅旗編集部による一九六三年の「スターリン問題について」ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（二）の以下の部分に注意をよせているのである。それは「スターリン問題は世界的な範囲の大問題であって、かって世界各国のすべての階級の反響を呼び、いまもなおいろいろと論評されている。それぞれのちがった階級、これを代表する政党、政派によって意見はまちまちである。今世紀のうちに、この問題について定論を下すことは不可能であろうと思われる」「中国共産党は一貫してつぎのように考えている。スターリンにたいしてどのように考え、どのような態度をとるかという問題は、スターリン個人にたいする評価の問題にとどまらない。いっそう重要なのは、レーニンの死後におけるプロレタリアート独裁の歴史的経験をどのように総括するかという問題、レーニンの死後における国際共産主義運動の歴史的経験をどのように総括するかという問題である」。「中国共産党は、スターリンがいくつかの誤りをおかしたと一貫して考えてきた。これらの誤りには思想上、認識上の根源があり、社会的、歴史的根源もある。もし正しい立場にたち、正しい方法でスターリンのたしかにおかした誤りを批判し、スターリンの誤りというぬれぎぬをきせるのでなければ、それは必要なことである。だが、誤った立場にたち、誤った方法で、スターリンに正しくない批判をくわえることには、われわれは一貫して反対してきた」。「われわれがスターリンを弁護するのは、けっしてかれのあやまりを弁護するのではない。スターリンのいくつかの誤りについては、中国の共産主義者は早くからこれを身をもって体験してきた。中国共産党は歴史上、「左」翼日和見主義と右翼日和見主義の路線の誤りをおかしたことがある。これらの誤りは、国際的原因の面からいって、いくつかはスターリンの若干の誤りの影響のもとでおこったのである。はやくも、二〇年代末期と三〇年代全体にわたって、その後また四〇年代の初期と中期において、毛沢東同志と劉少奇同志を代表とする中国のマルクス・レーニン主義者は、スターリンの若干の誤りの影響をおさえ、しだいに「左」翼日和見主義と右翼日和見主義の誤った路線を克服し、ついに中国革命を勝利に導いたのである。」等々である。しかしながら、粛清を進める中で、スターリンの全面否定の風潮を生み許しているのも事実である。

（ハ）毛沢東の秋収蜂起から井岡山への闘いは、コミンテルンの実践的総括であるとした。秋収蜂起から井岡山への闘いは、スターリンと第三インターナショナルの政治的忠告を無視し、政治的独立を達成してゆくものであった。逮捕以後、知ったのであるが、一九三六年のスノーとの会見で毛沢東は「第三インターナショナルは、世界プロレタリアートの前衛が全世界のすべての革命的人民に利するように、その集団としての経験をもちよる組織です。それは行政組織ではないし、又、助言以上の政治力をなんら有するものではありません。」といっている。真のスターリン批判は、中国革命の中で、毛沢東と中国共産党と中国人民がおこなったものであると我々は確認している。そして、この点からも現代のマルクス・レーニン主義である毛沢東思想を包括的に獲得していこうとしたのである。

（ニ）六〇年代の階級闘争を総括しようとした。日本共産党宮本修正主義集団との党派闘争において、宇野経済学、反スタ哲学、トロッキーとマルクス・レーニン主義を立脚点にしつつ、第一次ブンドが形成されたこと。六〇年安保闘争の敗北と三池闘争を革命的に総括できず、革命党と階級形成の基礎を形成する革命的理論を構築しえなかったこと。そして、自己の小ブル急進主義の弱点をつかれて、黒田哲学と宇野経済学を純化し、その小ブル性を小ブル党として純化していった戦旗派、ブンド小ブル革命主義を情勢分析の次元から肯定し、資本主義の危機の論証や戦略・戦術の獲得の基礎を客観主義的に、実際には主観主義的に追求しようとした革通派、六〇年代日本資本主義の政治構造・政治過程の面から、関西ブンドの市民的政治闘争、統一戦線の最左翼としての闘いを限界をもったものと考えつつも、これを肯定する立場で継承してゆこうとするプロ通派を生みだしたこと。戦旗派は組織問題・党建設を強調する点で革通派とプロ通派よりすぐれていたが、その党的立脚点を黒田哲学、

宇野経済学におくことによって自己を小ブル党として規定していったこと。革通派は、東京社学同→マル戦派→日向派として右翼的に客観主義、主観主義として受け継がれていったこと。一方、宇野、鈴木、岩田に立脚しているマル戦派と宇野経済学の小ブル性に反発し、レーニンの帝国主義論を対置したML派は、なぎさ帝国主義論の破産の下に革左の前々身の部分である警鐘を生み、ML派自身も毛沢東思想をかかげていっていること。関西ブント・プロ通派は、政治過程論の方法的立場を堅持しつつ第三期論→過渡期世界論を打ち出しつつ、ブント再建を担っていこうとし、第二次ブントの闘いをすすめていくこと等々が語られた。

第一次ブントの闘いは、現代修正主義をスターリン主義批判として展開し、プロ社会主義世界革命・日帝復活・プロ独・暴力革命・真のプロ党建設を提唱したこと等において、又これを実現すべく日本階級闘争の最先端において闘い抜いたことは画期的意義をもっており、歴史的なものであり、革命戦争を切り拓いた階級闘争の深化と経験の中で、この第一次ブント以来の闘いにたいし、左からのプロレタリア的総括が問われていることを確認していったのである。

この確認を内的に十分していったわけではない。しかし、当時革命左派の我々も、第一次ブント以来の闘いにたいし、左からのプロレタリア的総括が問われていることを容易に理解したのは次のことによる。赤軍派が榛名ベースにくる前に我々も榛名ベースにおいて、一二・一八集会を開き、柴野君の一二・一八闘争と蜂起かゲリラかの論文をふりかえったのである。そして、プロレタリアート独裁を放棄している宮本修正主義集団のワナにかかっているとしてのみ新左翼や赤軍派をみることはまちがいではないか、ということと、今迄の我々は一般的な党建設のくりかえしをいっていたのではないか、の二点がだされていったからである。

六七年一〇・八を前後とするベトナムを中心とした第三潮流の国際的、革命的な闘いを通して、民族解放・社会主義、先進国の前段階決戦＝攻撃的蜂起、プロレタリア国家の根拠地化と共産主義継続革命の三ブロックの結合の動向が客観的に形成され、これにたいし「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の観点をうちたて、一方これを対象化する理論的作業がすすめられ、過渡期世界論としてまとめられていったこと。そして、日米軍事同盟そのものに目が向けられていったこと等を我々は知っていった。革左が一〇・八以来の闘いを日帝打倒をかかげる人々の石、ゲバ棒、火炎ビン等の実力闘争の発展とのみ評価するのは決定的に不十分であること、等を反省していったのである。

六四年の社会主義中国の核実験を契機にし、プロレタリア文化大革命を支持し、十分な党的立脚点でないとはいえ、毛沢東思想を六六年～六七年にかかげた元ML、そして元マル戦と、過渡期世界論、攻撃的階級闘争の路線にもとづく赤軍派が建党建軍の下に銃を握りしめた革命戦争の地平で、毛沢東思想をかかげ、トロッキズムと毛沢東教条主義の同時相互止揚という基本方向を確立していっていることを明確に理解しはじめていったのである。

しかしながら、六〇年代の階級闘争の総括といっても、その必要を理解する程度で終ってしまったというのが正しいと思う。六四～六六年に警鐘が毛沢東思想をかかげたことを党的立脚点にもとづいて把えかえすことはできなかったし、過渡期世界論は一方では左翼空論的トロッキズムの残滓をもちながらも、後期レーニンや二〇年

代のスターリンや毛沢東を評価する水準と観点を十分にもっていることを正しく把えてもいず、戦闘団主義の「銃と共産主義化の党建設」を合理化し、六〇年代の階級闘争を歪曲していく一面を大きく有してもいたのである。

（ホ）革命の性格の問題は具体的分析を深め、解決していこうとした。連赤以降も我々は、革命の性格論争を獄中間の論争とは反対に、さける一面を有していた。そして、「新党」の際、問われている思想闘争の解決を通して、革命の性格論争も止揚することができるという確信をもったのである。しかし、それ以上にこの点について討論をにつめることなく、七一年一〇月の塩見さんの「民民革命論の検討」とその中の複合権力について十分に検討していこうという確認がなされていっただけなのである。

又、この「民民革命論の検討」の中の「米帝・米独占が日本五大財閥を支配していないこと――経済的に従属しているか、していないかのメルクマールは、独占・金融資本の関係を基本基準にすべきこと、レーニン帝国主義の観点にたって判断すること」「米帝は絶対的地位を相対的に低下させているとはいえ、絶対制を未だ失ったわけではないこと」「（日帝の）日米同盟関係における軍事的（政治的）劣位性」「日米両帝国主義は地理的にも直接双方において、又その市場圏としてのアジア太平洋地域に於ても、不可分の競争（競合）の関係にあり、又米帝の既存市場圏と米帝国市場への日帝の原料、市場の海外依存の特性も加味されて、日帝の再分割戦の関係にあり、戦前なら市場再分割戦→ブロック化→日米間戦争に発展してゆくべき関係が民族解放戦争、根拠地化、社会主義の為の闘争等、国際革命戦争統一戦線の伸長によってこれを疎外され、逆にこの矛盾を共同反革命とこれと一体の現代帝国主義の政策によって（局地的）共同反革命戦争とその枠内でのなし崩し的ブロック化（矛盾的な集団植民地主義）に矛盾を形態、転換されつつ発現させようとすること、現象的には運命共同体的様相をとる。以上の如き関係の中あって、日帝は米帝と激しく争いつつ、かつそこでの優劣関係を改変しつつも総体としては反革命階級同盟関係を解消できないばかりか、又しようと望まないばかりか、劣位な関係をも脱することは出来ない」。「共同反革命の不可欠性、市場再分割戦のなし崩し的展開＝矛盾的な共同侵略の展開、米帝の政治的、軍事的優位からして……日帝は米帝に反革命の基地を提供し、自らの権力体系（自衛隊、警察、官僚、監獄、裁判所etc）以外に自らの領土に米帝の権力体系を許容し、権力が客観的には複合化している事実を許している」。「権力の複合性（米軍の駐留）と日米同盟関係の反革命階級同盟としての半永久性はその内部の関係の変化はともあれ、国際階級関係の対峙から反攻戦への転化過程が続く限り――この関係を逆転することは今のところ考えられない――除去されることはない」「現代過渡期世界にあっては、ブルジョア権力は直接に国際的＝国内的反革命戦線の連鎖の一環を荷い、他面での自国帝国主義の一国的利害をこの反革命を通して統一してゆかなければならないことからしての複合権力性（米帝の権力体系を国内に許容すること）にたいして、我々はレーニンの『ウクラウド分析→権力分析（主敵の分析）→革命論』という方法をもって革命の性格を定めてゆく意義を忘れてはならないが、と同時にこれを継承しつつも、このウクラウドの置かれている国際的階級関係からの日本革命に占める米軍の反革命的抑圧の役割りを忘れてはならない」等々に注目し、反米愛国路

線の下での米帝が日本人民の主要な敵であり、日本軍国主義が主要な敵だというのは正しいのか、「日本軍国主義」は米帝の権力との関係で、西独や仏とちがわないのかちがうのか、反米をかかげるのは正しいが、更に反米をプロレタリア国際主義と世界革命の観点からしっかり把えるべきではないか等討論した。がこの討論はすすまなく、具体的分析を深め、解決していこうという確認の下に中途半端にしてしまった。

以上のように赤軍派と革命左派を止揚するところの政治路線確立の闘いを曖昧にしてしまったのである。我々はこのような討論、作業を七一年一二月榛名ベースで行なっている。山岳ベースを賛美した山岳根拠地主義の下でこのような討論、作業をしていったという決定的な限界を我々は決定的なものとしてもっていたのである。我々は山岳根拠地主義を「左」翼日和見主義的に正当化していたことを把え、正しく自己批判すべきであった。階級と階級闘争からの召還を意味していたことをはっきりみすえ、かくれひそんでいるだけであることを知り、消極的防禦、更にはにせの防禦におちこんでいることを把えるべきであった。そして、早岐さん、向山君の粛清をはっきりと自己批判し、更に「銃と共産主義化の党建設」の戦闘団主義を正しく克服し、その上で七一年情勢の中で我々が切り拓き直面した階級闘争の厳しい段階と厳しい主体変革にたいし、我々自身が挑戦しようとした思想闘争、思想問題にたいし、マルクス・レーニン主義でもってこたえていこうと苦闘に苦闘を重ねるべきであった。だが、　我々はこのような苦闘をせず、山岳根拠地主義、戦闘団主義等々にたいし「左」翼日和見主義的に正当化し続け、一方で直面している思想闘争、思想問題を核心にして赤軍派と革命左派を止揚するところの政治路線確立の闘いをすすめようとしたのである。そして、同志にたいしブルジョア思想、小ブル思想、更にはファシズム思想をおしつけ粛清をすすめ、思想闘争、思想問題の解決の方向をとざし、政治路線確立の闘いを曖昧にし放棄していったのである。

八、ファシズム思想の形成と一二名の粛清

早岐さん、向山君の粛清後、ますます精神主義の修養運動をすすめ、明確な山岳根拠地主義を生みだしていったのであるが、早岐さん、向山君の粛清後から「新党」に至る迄の山岳根拠地主義と超現実的なウルトラ精神主義のブルジョア修養運動を組織し、遂にはファシズム思想を形成する迄にいたったこととの関連を考えてみたい。

マルクス主義の唯物論の方法、史的唯物論の方法、資本主義批判に基づく階級分析の方法に従って具体的状況の具体的分析にたち、具体的に抑圧されたプロレタリア人民の資本家権力への怒り＝批判をわがものにすること、具体的な国際帝国主義と社会帝国主義の国際的プロレタリア人民、被抑圧民族の立場からの批判、具体的な日本帝国主義への七〇年代革命勢力からの批判をわがものとして、これを綱領、戦略、陣型、組織、戦術へと対象化すること、自己を実践と学習（教育）の絶えざる反復の中で、プロレタリアの前衛へと打ち鍛えてゆくこと、これ等の唯物論の開かれた具体的実践の立場、方法、観点に対して具体的なプロレタリア人民の具体的な敵権力の怒り＝批判を科学的に組織していくこと　等々にたいして我々は、榛名ベースにおいて、絶対的な「革命戦士」像を対置させたのである。中村愛子さんの調書によると、銃をうたれても死なない戦士になろうとしていたとのことであるが、ここにも我々がつくりあげていた絶対的な「革命戦士」像が象徴されている。山岳根拠地主義を「左」翼日和見主義的に正当化し、美化している限り、絶対的な「革命戦士」像をつくりあげる以外なく、いかなる形にしろ、我々には破算敗北の道以外なかったのである。

早岐さん、向山君の粛清の前後、我々はその旨赤軍派に話している。このことは、軍事競争の優越性を誇り、山岳根拠地主義・戦闘団主義、早岐さん、向山君の粛清の事実を赤軍派におしつける結果になっている。そして、このことから第一ゲリラ隊からはなれた者にたいする正しい対応、経験、又第一ゲリラ隊の闘いの全てを革左の我々は赤軍派から一切聞くことはできなかったのである。

山岳根拠地主義、戦闘団主義、早岐さん、向山君の粛清の真正面からの正当化は「新党」にいたってからである。とりわけ、早岐さん、向山君の粛清の文字通りの正当化は尾崎君の粛清後、「革命戦士の敗北イコール死」と尾崎君の粛清を合理化してからである。赤軍派の更なるプロレタリア革命派への質的飛躍を前提として、我々連合赤軍は赤軍派の路線に再編されつつあったのである。これが赤軍派と革左の止揚であり、小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への止揚であり、反スタ・トロッキズムと毛沢東教条主義の同時相互止揚である。この再編は革命左派が毛沢東思想をかかげ、建党建軍を堅持し、一二・一八闘争、二・一七銃奪取闘争を闘い抜き、奪取した銃から思想、政治の飛躍に直面していたことを評価するものであり、革命左派の闘いを党的に飛躍させようとするものであった。だが、この再編は非常に不鮮明であった。それは、赤軍派の更なるプロレタリア革命派への質的飛躍はめざされながらも、この飛躍の方向が明確に示されなかったからである。過渡期世界論、攻撃的階級闘争の路線を牙城にし、弁証法的唯物論、史的唯物論、マルクス主義経済学を深め、過渡期綱領の内実を深め、その内容で反米愛国路線を批判し抜くものでなかった。反米愛国路線には、先進国日本における原則的な社会主義の綱領を投げ捨てているという決定的な誤りが厳然と存在していることを「新党」革左派に過渡的綱領の内実をもってはっきりわからすものでなかった。だから、「新党」革左派の我々は当初、新しい反米愛国路線、古い反米愛国路線といっており、反米愛国路線といわない方がいいというのにたいしていわなくなっていっているのである。ここには過渡期世界論の継承・防衛・発展の立場・方法・観点が明確にだされていなかった。従って、正しい再編ができなかったのである。だから、山岳根拠地主義、戦闘団主義、早岐さん、向山君の粛清を「新党」赤軍派指導部が積極的に「理論的」「党的」にたかめ正当化していってしまったのである。そして、ファシズム思想を形成し、我々指導部の不十分さ、誤りを隠蔽し、一二名の同志を粛清してしまったのである。独占資本のイデオロギーは反理性主義、非合理主義、神秘主義をその根底においてもっているのであるが、階級闘争の厳しい段階と厳しい主体変革にたいし、マルクス・レーニン主義でもって質的飛躍、正しい再編をなしきれなかった我々は、独占資本のイデオロギーを徹底して純化し、超現実的なウルトラ精神主義をおしすすめ、「革命戦士の敗北＝死」実際には〝同志を殺しても何とも思わない気概〟をふりかざしていたのである。

九、一二名の同志はプロレタリア革命派である

赤軍派の質的飛躍、革左の党的飛躍を一二名の同志が望んでいたのは疑うことのできない事実である。思想問題・思想闘争に真剣に挑戦し、だからこそ我々指導部のおしつけたブルジョア思想・小ブル思想に疑問を抱いたのである。又、粛清そのものに疑問を抱いたのである。このことは徹頭徹尾正しいことであった。このことは七一年情勢の中で我々が切り拓き直面した階級闘争の厳しい段階と厳しい主体変革に対して、思想闘争、思想問題を核心にして政治路線を闘いとる道を切り拓いていくものであった。弁証法的唯物論・史的唯物論・マルクス主義経済学の不十分ないしは欠落を正しく克服していくものであった。十二名の同志こそ、そして十四名の同志こそ、七一年情勢の中で政治警察の超重包囲攻撃と果敢に闘い、科学的共産主義を真に獲得し堅持し、建党建軍の下にプロレタリア革命戦争への転換をかちとっていくプロレタリア革命派だったのである。

私は、尾崎君が榛名ベースでの十二・一八集会で司会をし「銃を持て!! 銃を持て!! 銃を持て!!」とアジテーションし元気だったこと、そしていわゆる我々の総括要求に対し、暗い顔をして考えこんでいたことを思い出さずにはいられない。思想闘争に必死に取り組み、しかし一方で超現実的なウルトラ精神主義に疑問を抱き考え込んでいたのであろう。これこそ正しいことであったのだ。小島さんは、早岐さん、向山君の粛清にこだわり続けていたが、二度とすまいと思いながらもこの二名の粛清を曖昧にし、しかもこの粛清はせん滅戦のためにやむを得なかったと居直り、自己批判を徹底して回避していた我々と異り、圧倒的に正しいことであった。七一年十一月に逮捕され、釈放後山岳にきた加藤君は、山岳はもう解散せざるを得ないと思っていたと語っているが、これは山岳根拠地主義を正しく自己批判していく方向性をもったものであった。又「脱走を考えただろう」という我々の執拗ないいがかりに対して、あくまで首をふって否定していた加藤君の姿を思い出さずにはいられない。進藤君を殴れという我々の要求に対して「私にはできない」といった遠山さん。殴られながら「こんなことを何故されるのかわからない」といったという進藤君。我々は顔がふくれ、血がとびちる程殴り、縄でくくりつけておきながら、〃同志的援助だ〃〃頑張れ〃等々といったのであるが、遠山さんも進藤君も反動的暴力をはっきり否定する発言をしているのである。一貫して考えこんでいた行方君の姿を思い出す。寺岡君、山崎君、山本さん、大槻さん、金子さん、山田君は次々とおこしてゆく粛清そのものに疑問をもったのであり、このことをもって我々指導部に対する不信をもっていったのである。山本君は「もはや、指導部についていけない」とハッキリと言っているのである。

我々指導部は、ブルジョア思想、小ブル思想、そしてファシズム思想を形成し粛清を進める中で極端に反動化し、これと対照的に十二名の同志はプロレタリア革命化していったのである。十二名の同志はプロレタリア革命化していったからこそ粛清されたのである。「革命戦士として死ねないのが残念だ」といった最後の寺岡君の言葉にみられるように、十二名の同志は建党建軍を断固として堅持していたのである。十二名の同志こそプロレタリア革命派であり、十二名の同志に新党方向は担われている。我々は十四名の同志に自己

批判し、生涯十四名の同志のことを忘れず、十二名の同志に担われた新党方向を継承・発展させるものである。十二名の同志は最初のプロレタリア革命戦士である。十二名の同志こそ、大阪戦争、東京戦争、九／三・四愛知訪ソ訪米実力阻止闘争、大菩薩闘争、政治ゲリラ闘争、米軍基地爆破闘争、ハイ・ジャック闘争をひきつぎ、十二・一八闘争、二・一七銃奪取闘争、連続M闘争、六・一七明治公園爆破闘争をひきつぎ、赤軍派の質的飛躍、革左の党的飛躍をめざし、思想闘争を軸とする路線闘争としての党内闘争の端初についたのである。十二名の同志こそ、プロレタリアート独裁をうちかためつつ党軍によって正しい諸階級、諸階層政策を基軸にした経済、政治、軍事、国際の路線によって社会主義の実現をめざし、マルクス主義経済学、資本主義批判をもって諸階級、諸階層分析を行い、革命の主力、同盟軍対敵階級戦略の一部としての中立化戦術等の戦略、戦術を獲得し、米帝権力体系の存在を国際帝国主義と国際プロレタリアートの戦争関係から把え、社会主義を準備する政治的過渡期が存在する反帝反米の社会主義革命をかかげていく部分であった。十二名の同志は正しい思想・政治路線と党建設をめざし、断固として建党建軍を堅持した最初のプロレタリア革命戦士であり、我々はこの十二名の同志を党内闘争において粛清してしまったのである。十二名こそプロレタリア思想とプロレタリア党をのぞみ、内乱とプロレタリア革命戦争をのぞんでいたのであり、これに対して我々は、党内闘争における極端な反動化を清算し、十二名の同志に自己批判し、それをもって十四名の同志とプロレタリア人民に自己批判し、十四名の同志の立場にたち、正しい連赤総括・正しい思想・政治路線・党建設の下に断固として建党建軍を堅持し、米日帝国主義資本家階級と、暴力革命の路線をもって闘っていくものである。山越えから軽井沢銃撃戦の闘いは、「共産主義化」を否定し「共産主義化」と闘い、政治警察・自衛隊の超重包囲攻撃を突破し、そして革命戦争の開始以来はじめての銃撃戦をたたかいぬき、プロレタリアートの革命的暴力の旗を高々とかかげたのである。我々は十四名の同志の立場にたち、又軽井沢銃撃戦を闘い抜いた立場にたち、内乱罪適用要求を断固としてするものである。

おわりに

内乱罪適用要求を行う我々は、七〇年代革命勢力、労働運動の新しい波と結合し、内乱罪適用要求の闘いを前進させていくであろう。獄中にある我々は現在、獄中のいわゆる「刑事犯」の人々との革命的階級的団結をかちとりつつある。この革命的階級的団結は、いわゆる「刑事犯」の具体的な資本家権力に対する怒り批判をわがものにしていくものであり、プロレタリア革命戦争への力強い転換をなしていくものである。この革命的・階級的団結をもって内乱罪適用要求の闘いを広く深くかちとっていくものである。

現在、エネルギー危機が声高く叫ばれている。これは資本主義制度の危機の反映であり、帝国主義制度の様々な矛盾が激化したための産物であり、国内外のプロレタリア人民に対する独占資本の野蛮な搾取と狂気じみた収奪によってもたらされたものである。「独占・金融寡頭制・過剰資本の形成と市場再分割・永続的な帝国主義戦争」「超巨人金融独占体」の帝国主義の「腐朽性と寄生性」「死滅しつつある資本主義」「プロレタリア世界革命の前夜」を示してい

るものである。賃金奴隷としてのプロレタリアートの世界がまじかいことを示しているものである。資本主義、帝国主義の危機と滅亡を世界末日の到来であるといいくるめているだけである。世界には「エネルギー枯渇」など絶対にありえない。人類に供給する自然界のエネルギーは無尽蔵であり、自然を認識・征服する人類の能力も限りないものであり、決して一つの水準にとどまるようなことはない。木をすりあわせ、石を打ち合って得る火花から、今日の石油石炭・原子力・太陽エネルギーにいたるまでこの点を十分に立証している。資本主義・帝国主義という「この反革命的体制は自分の力をつかいはたし、自分の社会的勢力をつかいはたしてしまった」（レーニン）にすぎないのだ。「エネルギー危機」は必然的に世界情勢を革命的情勢へと発展させるであろう。このような現在、獄内外の我々は正しい連赤総括の下に、十四名の同志の立場に立ち、十四名の同志の遺志をひきうけようと努力し、米日帝国主義資本家階級と闘い、ブルジョア国家権力機関を破壊するためにプロレタリアートの革命的暴力を組織していくのであり、我々に対する死刑攻撃に対し、内乱罪適用要求をもって、断固として、大規模に公判闘争を闘っていくのである。我々は日本革命・世界革命の道を必らず歩いていくであろう。公判闘争の勝利に向け一歩一歩歩いていくであろう。

（一九七四・六・一七）

革命左派の闘いから新党樹立をめざした党建設の闘い

（一）　我々の闘いは党建設の闘いである

現代過渡期世界は攻撃的階級闘争の時代である。恐慌や帝国主義戦争の経済的危機を利用する恐慌革命、あるいは「帝国主義戦争を内乱へ!!」とする革命ではなく、経済的政治的危機が国際的・国内的に内攻化、累進化し、高度に発展した先進資本主義の中に「平時」から内乱・革命戦争の成長が可能な時代です。だからこそ、党建設の闘いをめざす我々は、「現代は帝国主義が全面的崩壊に向い、社会主義が全世界的に勝利する時代である」と力強くいうことができるのである。帝国主義も資本主義も搾取制度も存在しない新しい世界をうちたてるために、世界プロ独をめざし、日本における反帝反米の社会主義革命を具体的に実現していくプロレタリア国際主義の任務を自覚することができるのである。

レーニンは「マルクスは――彼の無政府主義との闘争の真の意味が歪曲されることのないように――プロレタリアートに必要な国家の〝革命的過渡的な形態〟をわざわざ強調している」といい、「ところで、一階級が他の階級に向けて系統的に武器を用いること、それは国家の過渡的な形態でなくてなんであろうか」といっている。

我々は二・一七武器奪取闘争後銃で武装し、日米帝国主義にたいして系統的に武器を用いようとし、日本革命の具体的実践と結びつけた国家の過渡的な形態根拠地問題の正しい解決に直面していたのである。「平時」から内乱・革命戦争の成長が可能な時代に党建設を前進させようとしたこと。そして銃で武装し根拠地問題の解決を模索しながら武装闘争を追求したこと、これらのことは内乱をめざした以外の何物でもない。党建設の実際の闘いを抜きにして内乱――革命をめざしたといい、内乱罪で審理せよという要求をするつもりはない。又、それは正しくないと考える。日本共産党の政治的死、この死をとおしたところの宮本修正主義集団化、現代修正主義化のプロレタリア前衛党の不在という主体的条件の中で、六〇年代後半から七〇年代にかけての革命情勢の過渡期の開始展開にたいして、党としての闘いと党のための闘いを結合しようとしたこと、革命理論の進化と党主体の発展を獲得しようとしたこと、そして、赤軍派の質的飛躍、革命左派の党的飛躍に向けブンドの止揚としての毛沢東思想をかかげた新党樹立をめざしたこと、このことは我々が内乱――革命戦争をめざしたと主張する時に、まず第一に重要なことである。従って、我々の内乱罪の管轄違いの「申し立て」の闘いの今、私は革命左派の闘いから新党樹立をめざした迄の党建設の闘いを少

しでも明らかにしていきたいと考える。その前に、元指導部の私は、連赤の直面した革命的課題である思想問題を弁証法的唯物論・史的唯物論・資本主義批判・科学的共産主義の綱領の原則的部分に理解するのでなくこの思想問題を直ちに解決しようとし、そしてそれ故に反動的修養、自己権力の路線をひいてしまったこと、これにたいして一二名は、思想問題の解決、プロレタリア思想の獲得に最も真面目に直摯にとりくみ、そしてそれ故に分断された一二名の夫々一人一人が元指導部の反動的修養自己権力の路線に疑問をもち、あるいは反対し、マルクス・レーニン主義の学習・教育＝実践を結合したプロレタリア思想・整風運動の路線の方向を持ち、綱領の原則的部分に思想上の問題を理解し、赤軍と革命左派の闘いの歴史を継承発展させ、新党の樹立を担う人々であったこと、向山君、早岐さんを包摂できる人々であったことを強調しておきます。一二名は思想問題を党建設の問題に物質化し、党建設と共産主義と労働運働を結合し、この結合を基礎に党の下に組織した軍・陣型を把え、内乱・革命戦争の展開勝利を担う人々であったのである。一二名こそ新しい党建設の闘いを担っていく人々であったのである。

（二）六九年の国際・国内階級闘争の激動と革命左派の誕生

一〇・八羽田闘争以降、プロレタリアートの闘争及び農民・小ブルジョアジーの闘争が革命化・急進化した中で、それまでの警鐘の争議団の闘いから、我々は次第に反戦平和婦人の会、労働者反戦団、婦人解放同盟、学生戦闘団をつくり、安保粉砕・沖縄奪還・米軍基地撤去、日中国交回復の要求をかかげる運動に移っていき、六九年の国際国内階級闘争の激化の中で、六九年四月神奈川左派との闘いをとおして「プロレタリア革命派は反米愛国闘争のすばらしい発展と毛沢東思想の導きの下に、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と日本革命の具体的実践を結びつける中で党を再建しなければならない」と宣言して革命左派を誕生させた。この革命左派の誕生は、それまでの毛沢東教条主義から脱皮し、毛沢東思想の継承・発展を獲得しつつ、党建設の闘いの道を切り拓くものであった。革命左派を誕生させた大会は、当時、「活気に満ちた大会」「飛躍のための大会」といわれた。党建設の闘いの飛躍の出発点になった革命左派の誕生は、革命情勢への過渡期の開始・展開の影響を直接うけたものであるが、以下情勢をみていくことにする。

六七年三月一四日、佐藤が衆議院の施政方針演説で、日米安保条約を「今後もひき続き堅持する」といい、軍需産業へのテコ入れを強調四月二一日、佐藤が衆議院で「日本の外国向け兵器輸出を禁止することはできない」と言明、日本独占資本は南ベトナム・南朝鮮・台湾・インド・ビルマへの大量の軍需物資・兵器装備を供与。六月一〇日、佐藤政府が南ベトナムかいらい政府と一一〇万ドル供与協定調印。七月佐藤が戦後歴代首相として初めて南朝鮮を訪問、アジアの「反共体制」強化、「東北アジア軍事同盟」に肩入れ。七月五日外相三木武夫がバンコクの第二回アスパックで「大東亜共栄圏」のやきなおしの「アジア・太平洋経済圏」構想をうちだす。七月六日、佐藤政府「防衛庁設置法改正法案」「自衛隊法改正法案」を強行採決。八月、佐藤政府がインドに第七次円借款など七二〇〇万ドル供与。九月一三日から一五日、ワシントンで三木・ラスク第六回

「日米貿易経済合同委員会」三木がラスク・マクナマラ・ハンフリーと沖縄・小笠原諸島「返還」問題で秘密会議。九月二〇日から一〇月二一日、佐藤、米ソに協力して反中国包囲網強化のためビルマ・マラヤ・シンガポール・タイ・ラオス・インドネシア・オーストラリア・ニュージーランド・フィリピン・南ベトナム訪問、各地にいわゆる援助をばらまく。十月、佐藤政府、南ベトナムかいらい政権の「平定計画」に参与するため「農村建設青年奉仕団」を南ベトナム米軍基地へ送りこむ、数千万ドルのいわゆる援助を予定、自衛隊の南ベトナム派遣を表明。十一月十二日から二〇日、佐藤が米国を「公式訪問」米帝頭目ジョンソン・ラスク・マクナマラと一連の会談、小笠原諸島の日米共同作戦基地化を画策、コミュニケ発表。六六年から六七年に日本の「ベトナム特需」が「朝鮮特需」に近づき、佐藤政府は米軍に人力、兵器、弾薬、ナボーム弾、化学毒薬など既に千五百項目以上の軍需物資を供与、破損各兵器装備を修復、南ベトナムかいらい政権に大量の軍需物資、プラント設備を輸出、技師派遣。そして六七年十二月から佐藤政府は日本を大幅に米軍に開放、米第七艦隊兵站基地佐世保に連日来、弾薬を満載した米上陸用船、日本貨物船がひんぱんに入港、「民間航空」用羽田国際空港をベトナム侵略米軍機が自由使用。

六八年一月、一九六八年度国際予算案で軍事費を大幅に増強。二月二六日、ワシントンで「米日原子力協定」調印、原子力の「平和利用」を看板に反中国・アジア侵略日本核武装を推進。二月、沖縄嘉手納米軍基地に毎日二〇〇機にのぼる米B五二戦略爆撃機、大型輸送機、新型スパイ機が昼夜の別なく発着。板付、横田、立川基地でもベトナム侵略軍弾薬輸送米軍機がひんぱんに発着。米第七艦隊が西日本一帯に寄港。三月、川崎重工、川崎飛行機、川崎車両が合併。四月、八幡、富士二大製鉄も合併決定。四月五日、小笠原諸島を中国攻撃、アジア侵略の共同作戦基地とする「小笠原返還」協定調印。四月十一日佐藤政府が刑法一〇六条「騒乱罪」の適用決定。四月佐藤政府が「東南アジア開発閣僚会議」を主宰、アジアへの経済拡張に拍車。四月十一日、米軍がB五二爆撃機三〇数機を嘉手納基地に増派。七月、米ソが核拡散防止条約をデッチ上げる過程で佐藤が「核兵器を保有する中国が隣接していることを忘れてはならない」と反中国宣伝に拍車。一二月防衛庁が一九六九年度防衛計画制定、陸上自衛隊と警察力の強化に拍車。

六九年一月十四日、佐藤政府が閣議で一九六九年会計年度予算決定、国防予算の項目による直接軍事費が四八三八億円。二月蔵相福田が、東南アジア侵略のためのタイ・マラヤ・フィリピンへの経済拡張計画を発表。六月、防衛庁が一九七二財政年度から始まる第四次軍備拡張計画を決定。六月九日から十一日、第四回アスパック伊東市で開催。六月佐藤政府がインドネシアへの一億二千万ドル「援助」供与を決定。七月一日、日本海軍艦隊が東南アジア・太洋州へ遠洋訪問。七月二日、トロヤノフスキー駐日ソ連大使が愛知と会見、中国包囲のペテンのアジア集団安全保障体制で陰謀画策。七月二三日、佐藤政府が第四次軍備拡張計画の期限前実施のための二つの軍備拡張法案採決。七月三十日、日ソがシベリア木材「開発」で合意。七月、米独占資本クライスラーと日本独占資本三菱重工業の「提携」九州海域で大規模な米軍と自衛隊の海上合同演習。八月九日、船田中が百万人の郷土防衛隊創設計画を発表、自衛隊予備軍の役割りを果たすものとしての郷土防衛隊を「日頃から兵器操作の訓練をほど

とし、有事の場合に、国民皆兵〃の中核にする一方、国民の間に自主防衛意識を高めるねらいをもっている」と語る。八月十三日、防衛庁長官有田喜一が四次防で海軍拡充の要ありと強調。八月二〇日、佐藤政府が警官部隊の拡充を画策、自衛隊動員体制強化。八月二八日、愛知がマイヤ駐日米大使と会見、沖縄問題でペテン画策。八月、日韓第三回閣僚会議。九月、日米双方が軍事当局会議を設立、自衛隊の沖縄配備を画策。九月、日ソがシベリアに発電所の共同建設を決定、ソ修が日本独占資本十二社の事務所設置を許可。九月四日から九日、愛知が訪ソ、コスイギン・グロムイコらと審議。九月十日、日ソ経済委会開催。十月二六日から沖縄駐留米軍海兵隊第三師団が東富士演習場で軍事演習。十月三〇日新日本製鉄成立。十一月五日、日ソ航空協定調印。十一月防衛庁と駐日米軍司令官らが沖縄「防衛計画」制定。十一月十一日から十三日在日米軍と日米空軍が全国的な軍事演習。十一月十九日から二一日、日ソがシベリヤのウカドン銅鉱山の共同開発協議。十一月十七日佐藤訪米。十一月二一日から二三日、ニクソン佐藤ワシントン会議日米共同声明発表。十一月二七日、佐藤政府が南ベトナムかいらい政権に一千万ドルの商品「援助」供与決定。蔣一派へ二億五千万ドル供与。十二月三日佐藤政府が朴政権に一億二千万ドル供与。

以上にみることができる軍事主義の強化、対外的反革命侵略体制の構築、日米共同反革命同盟の強化、独占体制の一層の徹底した推進、日本帝国主義の新植民地主義等の一連の策動に対し、又、日本帝国主義が日本プロレタリア人民とアジア世界人民を犠牲にして今迄以上に搾取収奪抑圧を強め、一方、全般的には、米軍に対する従属的地位を深め、米帝の帝国主義世界体制を補強し、その再編強化を積極的に推進してゆくことに対して、一〇・八羽田闘争以降の闘争は、内乱状態をはらみ、革命化・急進化していたのである。

すなわち、六七年六月二七日、三里塚の農民八百人が成田市訪問中の運輸相大橋武夫を包囲、新東京国際空港建設の陰謀に抗議。八月一五日三里塚の農民労働者二千五百人余が、千葉市で、空港建設反対集会。十月十日、三里塚農民、労働者・学生千二百人が強制測量にきた機動隊二千人と闘い、これを阻止、十月十六日から十七日佐藤政府数百人の機動隊をくりだして強制測量、三里塚農民を弾圧、七月富士山麓・山梨県忍野村農民、北富士演習場内で坐り込み斗争、自衛隊の演習計画を粉砕、七月九日東京・神奈川などの労働者・学生三万余が砂川で立川基地拡張反対集会、七月十日三池鉄鉱労働者二千人余がスト突入、八月山谷の労働者三千人が警察に抗議デモ。十月北富士演習場の米軍秋期演習を阻止、以来忍野村、忍草村農民二千人米軍自衛隊の軍事演習阻止闘争を堅持、農民は米軍演習場内に堂々と入り、着弾地点に小屋をたて赤旗をひるがえさせ、雨が降ろうと風が吹こうと昼夜を問わずこの小屋を守り続けていくのである。十月一日、岩国・板付両米軍基地で数千人の佐藤の南ベトナム訪問反対集会。十月八日全国の青年・学生数千人が羽田で佐藤のベトナム訪問実力阻止をかかげ激戦を展開、佐藤政府は機動隊私服数千人装甲車警備車など数百台をくりだして弾圧、二百人を負傷させ、山崎博昭君を虐殺した。警官の殴打による脳内出血で、虐殺されたのであるが、警察・検察側は検死結果として「死因は内臓損傷」と発表、同時に警視庁は「学生が装甲車で轢殺した」と発表。そして証拠を隠滅し、口実のつじつまを合わせる為に山崎君の遺体から内臓の全てを抜きとるという蛮行を行ったのである。十月十六日、機

動隊八百人余が、早稲田・法政・中央各大学へ侵入、一〇時間の大捜査、各大学の学生これに抗議集会。十月十七日労働者・学生・市民ら六千人が日比谷で雨の中、山崎博昭君追悼集会。十月十日から二十日、国鉄労働者二千人余が立川駅で米軍用ガソリン輸送拒否闘争。労働者・学生・農民四千人余がこれを支援。十一月十二日労働者学生三千余が佐藤の訪米に激しく抗議し羽田空港付近でデモ、大量の機動隊がこれに弾圧二百人余を負傷させ、三百人余を逮捕、日中友好活動家ら五百人余が羽田空港ロビーで佐藤訪米抗議集会。十一月二六日沖縄那覇市で十一万人が大規模な抗議集会・デモ、佐藤ジョンソン会議コミュニケを糾弾。

六八年一月十七日、東京の青年労働者・学生一万人余が日比谷でエンタープライズ佐世保寄港反対集会、全国各地から佐世保に結集した学生八百人が機動隊二千人と激突、二七人逮捕。一月十九日エンタープライズ佐世保入港に対し労働者・学生千人余が米軍基地前で数時間にわたって闘争堅持。一月二五日、日比谷で七千人参加の抗議集会。一月二一日学生千五百人、労働者一万五千人が佐世保でひき続き大規模な闘争。一月東大医学部学生インターン制度に反対してスト突入。一月三一日三里塚農民五百人が集会。二月二十日、農民・学生二千人が成田市で空港建設反対集会、弾圧にきた二千人の機動隊と激突二二人が逮捕さる。二月二十日東京の労働者・学生・市民ら二千人が王子野戦病院設置反対集会デモ、三六人逮捕（三月十日全国から結集した労働者・農民・学生六千人が成田市営球場で抗議集会、成田市役所、空港公団分室へ向かってデモ、千人余が負傷し、百八十六人が逮捕）。三月三日青年労働者・学生千人が王子野戦病院設置反対集会九九人逮捕。三月八日労働者・学生・婦人・市民二千人余がデモ弾圧の機動隊と激突一五七名逮捕。王子闘争は多くの市民が学生と共に様々な野戦病院反対の意志表示をし、学生が去った後も、深夜遅く迄機動隊の暴虐に抗議し、機動隊と闘うということがくり返されたが、三・八闘争では夜一〇時の解散後もなお多くの市民が現場にとどまり機動隊の暴力を非難し、面と向って難詰し、投石したりの闘いが続けられた。四月一日労働者学生二千人余が王子野戦病院設置に反対して集会・デモ、弾圧にきた機動隊三千人と六時間にわたって激突、三百人余が負傷、百人余逮捕、解散後の深夜から翌日にわたる「機動隊は北区からでていけ」「税金泥棒帰れ」と叫び機動隊に激しく激突し抵抗し、交番の窓をこなごなにし、投石をくり返した。二千人を越える戦闘的市民の闘いの中で会社員榎本氏が機動隊に後頭部殴打され虐殺される。

四月二日労働者・学生・市民千六百人が、王子駅前で反対集会。四月八日労働者・学生二千人余が東京で王子野戦病院設置反対集会デモ。四月十二日新島の住民四千人余が米軍空対地ミサイル射爆場設置反対集会、四月十五日、東京の労働者・学生・市民七千人が王子野戦病院設置反対集会、デモ、学生一五〇人が王子駅前の派出所を襲撃。四月二八日全国各地の労働者学生一万人余が、東京でベトナム侵略戦争反対米黒人抗暴斗争支援集会、デモ、機動隊六千人余が弾圧。四月二九日沖縄米軍基地日本人労働者三万八千人がスト権確立・賃上げ要求スト米軍基地各所などにピケ、米軍がカービン銃でこれを威嚇。四月二八日沖縄デーにあたり、沖縄人民二〇万人余が那覇市で沖縄返還・ベトナム侵略戦争反対集会デモ。五月二日沖縄の労働者・青年・学生が嘉手納基地前でB五二爆撃機撤去集会デモ。五月七日三里塚の農民・学生八百人が集会・デモ、強制測量隊

をおいかえす。五月二六日三里塚の農民・学生が成田市警察署前で集会・デモ、弾圧にきた機動隊と衝突。五月十三日東京の労働者・学生約二千人が、日米安全保障協議委員会第八回会議に抗議して日比谷で集会デモ、機動隊四千人が弾圧に出動。五月十六日から二六日北九州市、福岡市の労働者・学生数千人が米貨物船入港反対、弾薬荷役拒否、米軍基地撤去要求闘争を展開。六月二日米空軍板付基地のF4Cファントム戦闘爆撃機一機が九州大学工学部に墜落、学生千人が現場で抗議集会・デモ。六月四日九州大学学生教師福岡市市民数千人が米軍板付基地前や米領事館前で板付基地撤去要求集会デモ、機動隊と激突。六月七日全国的規模の米軍基地撤去要求統一行動、九州大学学生がスト、学生青年ら五千人が板付基地前で機動隊と激突、一部が基地に突入、京都で福岡の闘争支援集会。六月九日から十六日全国各地でファントム九大墜落抗議、米軍基地撤去要求の諸闘争。六月十五日東大学生百人余が安田講堂を占拠、日大学生が大学本部校舎を占拠。六月十七日東大医学部学生、警官の学内侵入に抗議して集会。六月二一日東京の学生一万人余が神田で安保粉砕集会デモ、街頭にバリケード構築、千五百人の機動隊を撃退。六月十五日樺美智子さん追悼集会で全国規模の統一行動、東京で二万人集会、デモ、二〇人逮捕。六月十九日日米安保条約強行採決八周年抗議集会デモ、東京では労働者学生三千人余が国会首相官邸へデモ。六月二八日関西地区の学生・労働者が大阪市でアスパックキャンペラ会議抗議デモ、機動隊三千人と激突、三時間にわたって交通マヒ。六月二六日新宿駅内外で米軍ジェット機燃料、弾薬輸送抗議の大集会、デモ、四万人が参加、機動隊の封鎖線を突破して線路内に坐り込む。六月二八日昭島市、横須賀市・横浜市で米軍ジェット機燃料弾薬輸送増強抗議集会・デモ、学生百人が拝島駅に突入。六月三〇日学生・青年労働者が水戸米軍演習場付近で演習場撤去・プラトニウム場設置反対集会デモ。七月二日労働者千人が日比谷でジェット燃料輸送増強計画に抗議して集会。七月五日慶応大学生八千人が米軍資金による細菌兵器の研究に抗議して大集会。七月七日、労働者・学生が安保粉砕・沖縄奪還要求集会デモ。七月十六日沖縄基地労働者が四八時間スト。七月十七日労働者・学生七百人が南小倉駅に突入、米軍の弾薬輸送列車を阻止。七月二二日から二四日全国の農民代表二千人が反動農政に反対して連続デモ。八月十五日東京で佐藤政府の戦争政策糾弾集会。八月三日国際反戦集会。八月十九日米子市で航空自衛隊美保基地撤廃二千人集会デモ。八月二一日労働者・学生四千人が大阪豊中市で米軍の大阪空港使用反対集会デモ、機動隊二千五百人が弾圧。九月四日機動隊千五百人が日大に不法侵入、学生一三二人逮捕、学生二千人が抗議集会、機動隊を撃退して校舎を再占拠。九月六日、日大学生が四たび校舎占拠。九月七日、日大学生五千人が神田地区でデモ、機動隊二千人が弾圧、一二九人を逮捕。九月十二日、日大学生八千人が闘争開始以来最大の集会、労働者・市民参加のもと、二万人が街頭デモ。九月九日から二〇日国労・動労は機関車の助手廃止を中心にした国鉄五万人首切りに反対して、ATS（自動列車停止装置）を利用した順法闘争時限スト。九月十二日国鉄労働者が五万人首切りに反対して、名古屋・米原・西舞鶴・三村関区の共同闘争拠点をはじめ全国三三ケ所で半日スト。九月八日佐賀県唐津市で三千人が板付基地の切木地区移転反対集会。九月十二日から十三日宮崎県南郷町漁民がロケット打ち上げ実験を阻止。九月十五日北海道長沼町・呉市・福岡市・大和市・東京都で

米軍基地・自衛隊基地撤去闘争。九月二一日東京・大阪・愛知の労働者・学生が夫々反米集会、立川では機動隊三千五百人が弾圧一九三人が逮捕。九月十日労働者・学生六千人が日比谷でベトナム侵略戦争反対集会、米大使館へデモ、機動隊五千人が弾圧。十月九日、日大学生二千人が全理事の総退陣拒否に抗議して集会デモ。十月十七日門司港の労働者が米貨物船の入港に反対してスト。十月六日東京・大阪・埼玉・福岡・茨城などで同時に大規模な反戦反米集会デモ。十月八日東京・大阪・京都などで全国の労働者学生が羽田闘争一周年山崎博昭追悼集会、東京では一万人が参加、新宿駅で機動隊と激突、一四〇人逮捕。十月二一日全国の労働者・学生・市民が、十・二一国際反戦デーを数年来、日本の大衆闘争にみられなかった大規模な闘いとして闘う。騒乱罪適用される。青年学生が防衛庁構内に突入、新宿駅では学生が線路内デモ、このデモは米軍用機の燃料を輸送する上での交通の要衝、新宿駅を戦場としたものであり、米軍用機燃料の輸送を阻止し機動隊と肉薄戦をまじえ、鉄道労働者と合流して駅全体を制圧し、翌朝二時まで続けられた。この闘争に三万人が参加。大阪では十万人。十一月四日広島県漁民が米軍弾薬輸送船の荷卸しを阻止。十一月十五日福岡県民が米機墜落に抗議デモ、神戸市では、神戸港の軍港化反対集会。十一月十六日沖縄の八千人余が、嘉手納村でB五二墜落抗議集会デモ。十一月十八日北九州・福岡両市の労働者・学生が米軍基地撤廃要求集会。十一月十二日東大の学生二千人が安田講堂で集合・全国の学生二万人が東大に結集。十一月二六日大阪府の四六高校の学生が高校生連合組織結成集会、東北六県の十数校の高校生も同主旨の集会。十一月十八日、北富士米軍演習場返還要求決起集会。十一月二四日三里塚で八千人の集会。十一月二八日青山学院の学生、大学建物占拠、東京教育大の学生が日共のストライキ破壊を粉砕。十一月二九日東大学生・総長加藤一郎の紛争解決の新提案を粉砕。十二月一日東京、福岡などの労働者・農民・学生が米軍基地撤廃要求集会デモ、とりわけ板付基地撤去を要求するデモは機動隊の弾圧にひるむことなく板付基地に突入し、米軍が基地拡張を準備している工事現場で闘った。十二月十二日、沖縄で戦後最大四万の反米集会デモ、嘉手納米軍基地を包囲、二千人の青年・学生は米軍と機動隊の封鎖を突破し、基地の鉄条網に突撃し、基地内に投石、更にこの隊列は嘉手納基地のゲートに突っこみ機動隊とはげしくわたりあう。十二月十八日から十九日、全国の学生・労働者一万三千人が佐世保市でデモ、米原潜の入港に抗議。十二月十三日闘争を三百日近く堅持してきた約二千人の東大学生が、宮本集団の「話し合い集会」に反対して集合。十二月十四日中大学生四千人が集会、十五日からの無期限スト突入決議。十二月十五日東京の学生・労働者・市民四千人が安田講堂で集会。十二月二三日東大学生総決起集会、東大の全面封鎖を決定。東京外語大学生が二号館占拠。十二月二四日東大学生が宮本集団の大学当局との「交渉」の陰謀を粉砕。六九年一月九日東大の学生と闘争支援の学生三千人が安田講堂前で総決起集会、「七学部集会」粉砕を決意、宮本集団と激突、三千人の機動隊と私服が学内不法侵入。一月十日東大当局が「大学粉争解決」の「学生集会」、これを機動隊五千人が護衛、学生一四〇人余を逮捕、宮本集団が大学の「紛争解決のための十項目提案」全部受理、学生、宮本集団から建物奪回、一月十三日東大学生千人が決起、建物八ケ所再度奪回、大学正面に毛沢東の写真を掲げ「造反有理」とスローガンを書きつけた。一月

十五日全国の学生・青年労働者一万人が東大で大衆集会、デモ。一月十六日京大学生部の建物をバリケード封鎖、立命館大学・大阪教育大学・長崎大学でも闘争起こる。一月十八日から十九日東大闘争。安田講堂を中心としてヘリコプターと装甲車の援護の下に一万の機動隊の数千発の催涙弾、高圧放水などによる弾圧に赤旗をひるがえし、石、角材、火炎ビンで反撃。お茶の水神田地区で数千の学生が東大闘争支援の街頭闘争。市民一万人がこれを支援、お茶の水付近の二つの交番をうちこわし、敵をけん制し、機動隊の増派に対しては、労働者・学生・市民がこれをさえぎり不可能にした。一月十八日大阪大学学生校舎占拠。一月二十日大阪外語大学学生校舎占拠。一月二一日東大学生三千人が中大で学生弾圧抗議集会。一月二一日京都、大阪、神戸の学生が、京大学生闘争支援集会。関西学院大学の学生が社会学部の建物を占拠、北海道大学・静岡大学闘争起る。全国で六七大学の学生が闘争堅持。一月二二日東大学生数百人が東大構内へ突入決起集会。一月二六日機動隊五千人が日大・中大・明大を不法捜査、学生が三大学の校舎占拠。一月二九日東工大・横国大二学部でスト。一月二四日沖縄の労働者・学生、市民四万人が那覇市で大規模な反米集会。一月二八日京都で学生三千人が「沖縄及びアジアに関する日米京都会議」抗議集会、デモ。二月四日嘉手納基地周辺で五万五千人の反米集会、デモ。全沖縄小中学校教師一万人をはじめ労働者がスト。二月三日から四日、京都の各大学学生が五千人沖縄人民の闘争支援集会、東京・大阪でも反米集会。二月一日東京の労働者・学生・市民千五百人が東大・日大の学生闘争支援集会。二月三日学生十人が米大使館に突入。二月九日東京の高校生八百人が集会、デモ。二月九日十日関西学院大学の学生が三千人の機動隊の弾圧を三〇時間にわたって反撃。二月十一日中大で一万人集会。二月八日九日茨城・神奈川米軍基地周辺で夫々反米集会、デモ。二月十日金沢市と小松市で自衛隊機墜落抗議集会デモ。二月十五日、東京・神奈川の労働者二千人が横須賀市で米原潜寄港に抗議して集会デモ。二月二二日茨城で五千人が水戸米軍射撃場の即時撤去要求集会、デモ。二月二一日学生・労働者・農民・市民六千人余が日比谷で決起集会。二月二一日から三月二日京大など関西の大学学生が一段と闘争に決起。三月二三日　全国各地の労働者・農民・学生・市民が米軍自衛隊基地のまわりで反米デモ。三月三〇日、三里塚の農民と全国から結集した労働者・農民・学生・市民一万人余が新東京国際空港建設反対大集会。四月二十日全国各地の労働者七千人・学生三千人が東京で安保紛砕沖縄奪還集会、横須賀では米原潜入港抗議集会。四月二四日関東・関西・九州地方の八私鉄労働者七万人・全国のトラック運輸労働者八万人が二四時間スト。四月二八日沖縄デーで大規模な集会デモ、破防法適用。千葉国労の青年労働者は通勤電車をとめ、バリケードを築き機動隊と闘う。五月二日那覇市の、米軍基地労働者がベトナム海域行きを拒否。五月八日北海道長沼の市民が、支援の学生と共にミサイル基地建設に反対して闘争に起つ。五月十五日から十八日、中大・専修大・一橋大の学生が決起。五月十九日東大学生三千人が安田講堂前で大学当局の「紛争解決全学討論集会」に抗議して集会。五月二一日、日大で日大闘争一周年集会デモ。五月二三日東京の各大学学生四千人が明大付近でデモ、機動隊二千人が弾圧。六月一日各地の労働者・学生が出入国管理法案・外国人学校法案に反対して集会・デモ。六月八日九日、学生・労働者一万三千人が伊東市でアスパック抗議集会、七千の機

動隊が弾圧。六月四日沖縄米軍基地日本人労働者三万七千人が二四時間スト。六月五日沖縄米兵が銃剣で労働者のピケを弾圧、数千人を負傷させる。六月十日那覇市で米軍の弾圧抗議集会・デモ。六月十一日、日大で校舎占拠一周年記念大集会デモ。六月十二日、日本全国の九二の大学の学生が闘争を堅持、三八大学にバリケード、二五大学総長が辞任。六月二七日東京の約五〇の大学の一万人が「大学臨時措置法」（八月三日強行採決）抗議集会・デモ。七月二〇日、各地の労働者・農民・学生・市民七千人が日比谷で沖縄へのVX配備に抗議。七月二六日学生が琉球大でVX配備集会、米軍「民政府」に突入。七月二九日学生が労働者と共に東京で日米貿易経済合同委員会抗議集会・デモ。八月七日から十一日、日本各地の学生・労働者・市民六万人が大阪で万国博開催反対集会デモ。八月四日日本全国各地で「大学法案」強行採決抗議集会・デモ。八月十七日広大の学生三〇時間にわたって機動隊の弾圧に抵抗。九月三日、愛知訪ソ訪米実力阻止闘争に向けて、米大使館・ソ連大使館に火炎ビン闘争。九月四日、愛知訪ソ訪米実力阻止デモ、実力阻止闘争。九月一日東京の九段高校・千葉の千葉東高校・大阪の市岡高校などの学生が集会デモ。九月三日早大の学生、弾圧にきた機動隊千人と激突。九月五日日本全国各大学の学生代表一万五千人が東京で全国全共闘連合結成、この結成宣言は「安保・沖縄闘争勝利」をスローガンに安保紛砕の闘いを主体的に担い、学園闘争を貫徹しなければならないと強調している。九月二一日、二二日、一月から校舎を占拠してきた京大の学生が三〇時間にわたって機動隊の弾圧と抵抗。九月十五日関東地区労働者三千人が東京で佐藤訪米阻止大集会。九月二三日、東京の学生が米軍野戦病院設置反対集会。九月二八日、三里塚の農民と全国各地から結集した労働者・学生一万人が三里塚で大集会。九月三〇日、東京の学生二千人余が明大で集会・デモ、機動隊二千五百人が弾圧、三五〇人を逮捕、等々の闘いが闘いとられていったのである。

十・八闘争以来の革命化急進化した闘いは、一方において、なし崩しファシズム、機動隊政治と真向から対決するものであったが、労働者・農民・学生を緊密に呼応させていったものであり、全国の米軍基地撤去闘争・三里塚の闘争、羽田闘争、全国を席巻した学園闘争・沖縄人民の不屈の闘い等々には、安保大決戦、七〇年代闘争へ向けて大きく前進し日米帝国主義に反対する政治闘争に発展し、素手のデモ、坐り込みの闘争形態から、石つぶてゲバ棒、火炎ビン、大鎌をもっての闘争にまで発展した。これらの闘いは、日本共産党宮本修正主義集団と真向から闘争を進めていくものであった。

六六年九月、宮本修正主義集団に反対し、造反し、山口・佐賀・愛知・福岡・兵庫・大阪などに日本共産党（左派）県委員会が成立。六七年十月三日、野坂参三・中国駐在日本代表招還歓迎集会で中国のプロレタリア文化大革命を誹謗。六八年二月六日の第五八回衆議院予算委員会で佐藤は、「各党のいろいろの説明をきいてみるが、それぞれ自主防衛と平和外交等比較的論旨が一貫しているのが共産党の主張ではないかと思う。私は共産主義は反対だが、自主防衛論ならびに平和外交論については日共の考え方に賛成というか――共産主義は別ですよ」と発表し、宮本修正主義集団の「自主防衛論」「平和外交論」を称賛。六八年七月十二日参議院選挙の選挙運動中宮本修正主義集団は「暴力革命は絶対にやらない」と言明。このことは又、宮本顕治自身の口からも「政府の性格を暴力的手段によっ

て変えることは考えていない」と表明しているということでもある、等々のように、宮本修正主義集団の反革命的本質が明らかにされている。そして、十・八羽田闘争以来の革命化・急進化に対し、鉄棒やゲバ棒をもって直接暴力を使い闘争を破壊し、日本人民の革命運動を弾圧する姿を明らさまにさらけ出してきたのである。

これらは、日本共産党指導部が自らの思想上、政治上、路線上の総括をせず、フルシチョフのスターリン批判にならって単なる徳田球一の家父長的指導方法や、極左的武装闘争方針や農地改革の過小評価等の派生的問題のみをあげ、フルシチョフの五六年二〇回大会と五八年モスクワ声明の現代修正主義の社帝路線にとびつき、五五年六全協において武装闘争を清算し、五八年第七回大会に於いて平和共存戦略の下での民族民主主義革命の議会主義路線を確定し、そしてその後明確に宮本修正主義集団になっていった者の当然の道であり、更には今後の社会帝国主義化の軌道を示すものである。

以上のような革命情勢への過渡期の開始展開の中で、更には七〇年安保大会戦を前にして「マルクス・レーニン主義の普遍的真理と日本革命の具体的実践」を結びつける中で革命左派が誕生したのである。この誕生は、神奈川左派内の闘い、神奈川左派との訣別をとおして勝ちとったものである。

神奈川左派に残った人々は「毛沢東思想を現代におけるマルクス・レーニン主義の最高峰であることを認識しながら自分自身を革命におしすすめる一個の力とみなすと共に、自らを革命の対象をみなし、自己の中に二つの世界観を認識し、毛沢東思想をもってブルジョアジーの世界観を打倒し、プロレタリアの世界観をうちたてる、不断の努力を行うことに反対する形而上学的思想傾向、この思想傾向は我が組織の一部が自己批判の作風を忘れ人民に対する謙虚さを失い傲慢と一人よがりの病に侵され、人民から遊離した最も主要な原因である。革命をめざしたその日から、マルクス・レーニン主義者は、毛沢東思想を武器として、革命に参加して勇敢に闘うと共に、自己の中に常に存在するブルジョア世界観との闘争を開始しなければならない。自己を革命の対象とみなして闘う最大の武器は老三編であり、闘う方法はより多くの自己批判を行うことである」「我々は、労働者階級の内部における地道な活動を行う事を否定しないのみか最も重要な活動の分野と考えている」「最近の全員会議において一部の学生出身の〝党員〟は、この思想建設優先の党建設路線に反対してわが組織を去っていった」「われわれ全日本のマルクス・レーニン主義者が引きつづき努力すべき目標は、毛沢東思想で自分自身の内部のブルジョア世界観と闘ってプロレタリアートの世界観を打ち立て、六一年宮本綱領を更に全面的に打ち破り、何よりも労働運動の内部から宮本修正主義の影響を一掃することである。この過程を通じて真の革命綱領を全日本のマルクス・レーニン主義者が共同して獲得することである。これ以外の道はない」「その方向は、全日本の毛沢東思想をかかげて闘うマルクス・レーニン主義者は、革命的労働者・革命的人民と更に広汎に団結し、〝老三篇〟を武器として自己批判を行う作風を基礎に党の再建を目的として相互に討論し共同できる活動の形態、第二に、宮本六一年綱領を打ち破り、宮本修正主義を先ず労働運動内部から追放しつつ革命綱領をうち立てる為に協同して知恵を集め討論し、相互の闘いを支援し合うことのできる活動の形態である」といって革命左派の誕生に反対した。七〇年安保大会戦を前にしてこの発言は、神奈川左派、そして六六年に

日本共産党・宮本修正主義集団から造反した日本毛派の非実践性と毛沢東思想啓蒙運動の基本性格を表わしているものである。実践的には、京浜安保共闘の結成とその活動運動、そして全国政治新聞の着手に反対したのであるが、一般的な思想問題の提起、思想建設優先の党綱領路線の主張をもってのこの反対にたいし、我々は、書斉主義、綱領「主義」であり、「老三篇」のおしつけ、ふりまわしであり、口先だけの思想問題に終るものであり、思想問題を解決していくものではないと考えた。七〇年安保大会戦のただ中での京浜安保共闘の結成とその活動、運動、全国政治新聞の着手とその運動の中でこそ思想問題を真に解決できるのだと考えることは一般的に正しい。しかし「無内容」なことをくり返している神奈川左派は歴史のくずかごに投げすてられるであろうと考えたのである。

このように誕生をかちとった革命左派は、

(イ)毛沢東思想、ブルジョア世界観と闘ってプロレタリアートの世界観を打ちたてる等、思想問題を語る神奈川左派にたいして、実践の中で思想問題を解決していく実践の中でこそ思想問題を正しく解決できると対したのであり、プロレタリア階級に依拠し、プロレタリアの階級苦、労働苦をマルクス・レーニン主義の資本主義批判をしっかりと学びとることによって、科学的理論的に把みとる方向を打ちだすことはできなかった。「老三篇」の一般的・無媒介なおしつけに反撥し、我々は思想問題を実践の中で必ずや解決していくという決意をもったのであったが、決意だけであった。

(ロ)我々自身がそれまで神奈川左派であったことを思想的・政治的に総括しぬくという姿勢が皆無であった。いやむしろ、神奈川左派時代に反米愛国路線をかちとったのだと表現していた如く、反米愛国路線を教条化、固定化する傾向を有していたし、反米愛国路線を思想・政治・理論の全面にわたって検証するということはなかった。

(ハ)六八年のはじめにできた神奈川左派は、日韓闘争時の元ML、特殊には元マル戦の我々の部分と、六〇年に日本共産党・宮本修正主義集団から造反した神奈川の毛派の部分の合体であったが、この合体は実践の検証がなかったという反省的考えを持っただけである。従って反米愛国路線を固定化し、実践のみを極度に強調していく、すなわち反米愛国路線プラス実践という傾向を有していたのである。

(ニ)一〇・八羽田闘争以来の急進化・革命化の中でそれらの影響をうけ、それまでの右翼日和見主義に相変らずとじこもっている神奈川左派にたいし、対照的に急速に右翼日和見主義を脱そうとした等の諸点をもっていた。

〈三〉革命左派の闘いと政治ゲリラ闘争

①革命左派の誕生から九・三、四闘争

右翼日和見主義を脱皮し、党建設の闘いの道を切り拓こうとした我々革命左派は、ただちに京浜安保共闘を結成し、又機関紙「解放の旗」を発行していった。京浜安保共闘は、七〇年安保大会戦を反米派として闘い抜こうというものであり、反米派の結集を呼びかけながら、四・二八闘争、六・一砂川闘争、六・一東京共青政治集会、春闘総括討論集会、六・一四反米派集会、六・一五闘争、六・二四入管法闘争、七・七集会等々とり組んいった。又、六月末には、労働者行動隊・婦人行動隊・学生行動隊を結成していった。この行動隊は、四・二八闘争時の反戦行動隊等から学んだものであり、五一

年日本共産党の軍事資料としての「球根栽培法」を学習資料にしたりし、行動隊の訓練を河原で行なったりした。行動隊の第一の行動は組合結成したばかりの工場に団交におしかけたものである。「解放の旗」は全国政治新聞「赤狼子」の発行をめざし、東京共青・佐賀の毛派等の結集を呼びかけたがはたせず、革命左派が神奈川以外の地にいき、全国的に活動していくことになっていた。

革命左派誕生以来の闘いは極めて活発であり、以後、我々は、八・一四集会、八・一五基地撤去闘争や「闘う母親大会」を闘いとっていった。この「闘う母親大会」は「母親の底力によって唯一分裂しなかった大会」という母親大会の伝統を崩壊させ、宮本修正主義集団、新日本婦人の会に牛耳られた母親大会を六九年にはじめて、婦人会議・暮しの会・婦人民主クラブがボイコットしていく牽引力となった。婦人戦線においても、宮本修正主義集団とはっきり訣別しこの集団と闘わなければならないことは明確に闘いとったが、しかし、この「闘う母親大会」は三里塚・北富士の婦人労働者・先進的婦人の結集をかちとることはできず、婦人運動の路線を深く問われていた。この「母親大会」の後すぐに、九／三・四愛知訪ソ訪米実力阻止闘争が提起されていった。この提起は「今闘わなければ、情勢に決定的にたちおくれる」というものであった。この九／三・四闘争は文字通り革命闘争の戦火の中で党を建設しようという気概に満ち満ちたものであり、それまでの右翼日和見主義と真に訣別しようとするものであった。これは行動隊によってになわれたものであるが、米ソ両大使館に同時刻に火炎ビンを投げ込んだものであり、又、一万近くの機動隊の阻止線を突破し、愛知訪ソ機が飛び立たんとした時「毛沢東思想万才！」「反米愛国」の旗をうちふり、スクラムを組み、滑走路内に突撃し、火炎ビンを投じたものであった。十一月佐藤訪米実力阻止、七〇年安保大会戦に向けて実力阻止闘争を闘いぬいたこの闘いは、精神的原爆、「一に困難を恐れず、二に死を恐れぬ英雄的気概」等の必要を示し提起した。「我々が反米愛国路線を精神的原爆として闘いとり、米日反動に対し、後から後へと身を挺して突き進むならば、必ずや勝利は我々のものである」「反米愛国路線が今日かかえる困難は、正しさ故の困難であることを確信し、一に困難を恐れず、二に死を恐れぬ英雄的気概をもって闘った勇士」と表現し、精神的原爆や革命的気概を政治路線に求めるべきであることを示した。「七〇年にむけた米日反動の罪悪を意図――アジア侵略のために沖縄を永久核基地化し、本土を沖縄化し、日本全土を兵器工場・侵略基地にし、更には日本人民を米日反動のたまよけにかり出そうとしている」「米日反動の打倒なくして人民の解放はあり得ないこと。武装した米日反動に対し、人民の武装なくしては勝利しえないことを示し、実力闘争と実力組織とを一層発展させること」「宮本修正主義集団は米日反動の手先である」こと、革命闘争の「革命闘争の烈火の中からこそ真の党建設が闘いとられるのであり、それ以外の所からではない」こと、「片時も権力を忘れず、プロレタリア独裁思想を貫くマクルス・レーニン主義毛沢東思想で武装した党建設を闘いる」こと、「現在は〝革命が戦争をおしとどめるのか、革命が戦争を引き起こすか〟という偉大な時代に入っており、日本に於ても例外ではない」こと、等々に基づき、我々は、精神的原爆・革命的気概をもったのであり、このことにより九／三・四愛知訪ソ訪米実力阻止闘争を闘い抜き、又、この闘争後、急激にもたらされた政治警察との攻防関係に耐え抜き、非合法と合

法、非公然と公然のそれまで経験したことのない活動、組織活動に直ちに移っていったのである。はじめて十人以上の逮捕者を出し、毎日毎日尾行、はりこみ、電話の盗聴を受け、柴野君はじめ何人かが指名手配を受けたのである。我々は実力闘争と実力闘争組織を一層発展させ、その中で非合法と合法、非公然と公然の活動を作っていこうとした。我々は神奈川左派の時から、いや正しくは「警鐘」の時から非合法・非公然活動をかち取ろうとし、非公然の会議、非公然のアジト・ペンネームを使うこと等々、訓練し気を付けてきたが、現実にもたらされた攻防関係が開始されたら、右翼日和見主義の下でのこれらのことは何の役にも立たなかった。これらの「非合法非公然活動」は階級闘争と関係ない会議であり、アジトであり、ペンネームであり、敵権力からただ黙々と「かくれ」ひそんでいただけだったのである。この急激な攻防関係の変化に耐え切れず、我々と友好関係にあった毛派の組織がしだいに遠ざかっていったこともある。これはいわゆる日本毛派の非実践性、サークル主義をみせつけられ、毛派の結集、反米派の結集による党建設など　幻想であること、問題にならぬことを理解していった。そして現在のように毛派が分散化し、その上で存在しているのは、毛沢東思想を日本革命の具体的実践に正しく適用できないでいるからだということを知った。

運動を重んじ、実践第一の革命的現実主義の立場にたち、何よりも権力と闘うことを重視していくというそれ自体は正しい体質を持っていた我々は、毛派の結集・反米派の結集による党建設など幻想であることを理解し、実力闘争組織を一層発展させようとしたが、しかし戦前戦後の革命運動は日本共産党からブントに受けつがれていくことになったこと、戦後革命運動の歴史は、五八年から開始されたこと等をはっきり把えず、第一次共産主義者同盟に牽引されていった日本新左翼運動の闘いに「〝日帝自立〟論にみられるように打破すべき対象・闘いは明確に意識されておらず」「革命の根本問題、権力を中心に、日本の現状規定しない日帝自立論からくるものであり、日本民族を武力支配しているアメリカ帝国主義を軽視しているもの」「階級決戦論・政策阻止革命論により、人民の権力を真剣に準備しない」等々いって一線を画し、実力闘争等、運動の形態だけを学び、これらの運動の全歴史を学ぼうとせず、反米愛国路線をお題目化していった側面がある。ここに我々革命左派が毛沢東教条主義から脱皮できない大きな問題があるのであった。九／三・四愛知訪ソ訪米実力阻止闘争は、一方で反愛路線をお題目化しているが、もう一方で、実践第一の革命的現実主義の立場にしっかり立った出発点であり、我々が武装建軍の問題を提出し、日帝権力と真向から闘っていくものであった。又、精神的原爆・革命的気概を提起し、これらを実践的にも理論的にもどのように勝ち取っていくのか課題にしていったものである。

②十一月佐藤訪米実力阻止闘争まで

以後、九／三・四愛知訪ソ訪米実力阻止闘争をひきつぎ、「米日反動の暴力装置粉砕をめざす恒常的な政治闘争の本質をもつ、行動隊による政治ゲリラ闘争」をめざし、十一月佐藤訪米実力阻止に向けていった。

一〇・二一闘争は十八日より開始され連続的に闘かわれた。逮捕された中に数名の中学生がいた如く、高校生にとどまらず中学生も参加したものであり、火炎ビンを大衆的武器にするまで発展し爆弾

の使用に至るまで大いに拡大・前進・発展をとげ闘かわれたのである。横田基地・立川基地・全国各地の交番・日本生産性本部・NHK・自民党本部・東京拘置所・自衛隊市谷駐屯所へのゲリラ闘争をはじめ機動隊による拠点大学・高校の一掃という、いわゆる、先制攻撃をはねのけ、ブルジョア新聞をして「東京中がゴーストタウンと化した」といわしむるほどの弾圧体制を突破して新宿・高田馬場占拠を闘いとったものであり、十一月佐藤訪米実力阻止闘争に向けつきすすんだものである。

このような中で我々は「この実力闘争の中で奮闘し暴力革命へと発展させる条件をつくるのであり、この嵐のような勢いの反米愛国闘争からはなれた暴力革命は空論にしかすぎない」「現実におこっている嵐のような反米愛国闘争の前進に対し本の中から頭の中からマルクスやらレーニンやらの〝ドグマ〟をひき出し杓子定規にあてはめ〝現実は誤まっている〟とあれやこれやとわめきちらしている人たちは、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想の生きた魂〟具体的状況を具体的に分析する〟〝現実から出発する〟ということをせず〝靴にあわせて足をけずっている〟のであり、そうした口実で反米愛国闘争の嵐から身をよけようとしているのである」と主張し、一〇・二一横田基地米軍機炎上闘争・立川基地へのダイナマイトを使用した政治ゲリラ闘争等、政治ゲリラ闘争を闘い「佐藤訪米実力阻止は、日本人民の闘い方しだいでは闘いとれる」といい、政治ゲリラ闘争を闘い抜くことによって十一月佐藤訪米実力阻止をかちとろうとした。

我々は十一月佐藤訪米実力阻止を政治ゲリラ闘争によってかちとることができなかった。十一月十七日の佐藤訪米を実力で阻止すべく政治ゲリラ闘争を闘いとろうとしたができなかったのである。敵権力は四・二八沖縄奪還闘争に対する破防法の適用、大学法強行採決、そして十月以降は安保非常体制をとって弾圧体制を恒常化した。十一月一〇日以降、羽田空港周辺では機動隊による不当検問が行なわれ、空港職員関係者には通行証を発行し、一般通行人に対しては全て検査した。主要幹線道路 においても通行人・トラック等への不当検問が強行され、これに対する激しい抗議には機動隊は一切無視するか「文句あるか」と暴力的威圧を加えるかであった。佐藤訪米前の五日間は全警察力をこれに向け連日にわたり首都二万五千、全国七万の警官を動員し、人民弾圧のためにのみ存在している政治警察の正体を露わにした。又それまで拠点大学等に集中していた先制攻撃 —— 不当捜査が個人の家にまでおよぼされ、理由も何もないまま活動家という活動家の家は強制捜索され、その件数は数十件にも達した。警視総監秦野は「直ちに騒乱罪に踏み切る」「ためらわず拳銃を使用せよ」との通達をだした。そして羽田周辺の蒲田・萩中・羽田の三地区五〇町会に自警団を組織し、第二機動隊の役割を果たした。この自警団に宮本修正主義集団は積極的に協力して、第二機動隊の役割を十分に果たしたのである。こうして十一月十六日以前の数日、羽田とその周辺を中心とする全都は機動隊の町と化した。

一方、宮本修正主義集団は早くから「佐藤訪米そのものには反対しない」態度を表明し、又右翼社民は十六日に「過激団体が介入する恐れがあるから、十七日の現地集会を中止する」といつもの如く決定し、十六日の集会とデモだけにし、十七日佐藤米実力阻止闘争に水をかけようとし、背を向けた。

このような中で事前検挙・捜索をかいくぐり羽田に結集した二万

あまりは検問を突破し、火炎ビン・ゲバ棒・石を武器として佐藤訪米実力阻止をめざし実力闘争を闘い抜いたし、各所では機動隊と果敢に戦闘をくりひろげ三つの警察署・一五交番を襲撃し、数ケ所でバリケードを築いて闘った。更に真夜中から明け方にかけて各所で機動隊と戦闘をくりかえした。又、社会党が現地集会を中止したがこれに対し、社青同・反戦青年委員会・都職労・国労・べ平連などによって現地集会・デモが闘いとられた。

我々はこれらの闘いと呼応し、政治ゲリラ闘争を闘いとろうとしたのである。実力闘争と実力闘争組織を十一月佐藤訪米実力阻止闘争の高揚の中で、政治ゲリラ闘争とこれを担う組織・行動隊へと発展させようとしたのである。そして実際に佐藤の訪米を阻止すると共に、敵権力の暴力装置と真向から対決する暴力革命が必要であること、遠いかなたの暴力革命ではなく、この高揚の中で政治ゲリラ闘争を闘い、その組織をつくり、暴力革命の道へ邁進しなければならないこと、邁進できることを示そうとした。十一月佐藤訪米実力阻止を政治ゲリラ闘争とその組織を発展させようとした。

〈四〉「解放の旗」七号

①十一月佐藤訪米実力阻止闘争の総括と革命左派の限界・問題点

十一月佐藤訪米実力阻止闘争において、政治ゲリラ闘争を闘えなかったことに対し、「イ、米日反動派の凶暴性に対する認識の甘さ、ロ、宮本現代修正主義が反革命であることについての認識の甘さ、ハ、自然発生性的な人民の反抗の巨大な力を確信できないでいる」と総括し、結局は政治ゲリラ闘争を担う行動隊の自覚の不十分さ、なさに帰していく傾向をもった。又「赤軍派五〇名が大菩薩峠で一網打尽にあったり、赤軍派の幹部会議は官憲にもれていたり、中核派の羽田闘争指揮者が事前逮捕され、作戦地図が奪われ、しかも当日の闘いが奪われた作戦どおりに闘かわれようとした。こうしたことはすべてこれまでの〝平和時〟の闘争スタイルの残りカスであり、合法ボケといわれてもしかたないものである。革命党を志向する以上、合法政党など考えられないのであり、非合法面が基本で、非合法で貫くため、合法面も存在するのである。党建設は最悪の事態に備えて闘いとらねばならないということがまだ不充分にしか行なわれていない」といい、非合法と非合法組織をいかにかちとっていくのかという観点からでなく、非合法や非合法組織を形骸的に把え形態等で解決していこうという傾向も有していた。これらの傾向は反米愛国路線のお題目化の反映であった。

神奈川左派と分派闘争を闘い革命左派の誕生をかちとって以来、実力闘争を闘い、政治ゲリラ闘争を一心に闘ってきたのであるが、十一月佐藤訪米実力阻止闘争の総括を契機に解放の旗七号でもって革命左派の総路線が展開された。それはそれまでの反米愛国路線プラス実践というのに対してより新左翼の実力闘争としての反修闘争を強調していくものであった。これは六七年の十・八羽田闘争以来の急進化革命化に影響され、とりわけ六九年はじめの東大闘争や七〇年安保大会戦に向けての大高揚に影響され、この影響によって唯一右翼日和見主義から脱皮した —— 従って意識的に毛沢東教条主義から脱皮しようとしたのではない、革命左派の内実を示すものであった。

解放の旗七号は、

一九五六年の砂川基地闘争は第一次反修闘争の始まりであった、が、この時点における実践上（政治上）の分岐点は基地闘争において実力闘争を展開すべきか否かであった。第一次造反闘争にたちあがった同志諸君は実践的に正しい方向に突き進んだ。即ち実力闘争を選んだのである。一方、宮本現代修正主義は実力闘争を否定した。この具体的実践をおさえて、理論的分岐点をもとめれば、明らかに米帝（米軍基地）とその手先、日本独占資本（機動隊）に対し暴力革命（実力闘争）を堅持するのか否か、プロレタリア独裁思想を堅持するのか否か、にもとめられるべきであった。ところが第一次反修闘争に起きあがった同志諸君は具体的実践ときり離して理論的分岐点を求めたため（この当時、実践ときりはなされた敵の規定論争に加わって）日帝打倒なのか、米日反動打倒なのかに求めてしまった。このことは宮本現代修正主義の反革命的本質をあばくのに大きな妨げとなった。六〇年安保闘争においても実力阻止（ジグザグデモ）なのか、おしょうこうデモなのかが実践的政治的分岐点であった。この実践的課題と結びつけて理論的分岐点を考えれば、それは暴力革命（実力阻止）なのか、議会主義かに求められたはずであった。然しやはり具体的実践ときりはなして理論的分岐点を求めたために、それを又も、「日帝」か「米日反動」打倒なのかに求めてしまった。そして宮本現代修正主義の本性を正しく見抜けなくしてしまった。この傾向は六〇年以降、現在でも続いている。

とある。これは現象的な「暴力革命・プロレタリアート独裁を強調するか、議会主義であるか」の革命の形態上の相違を強調し、この暴力革命・プロレタリア独裁を強調するそれ自体は正しい点にのみ立脚し、宮本修正主義集団との思想・綱領上の相異を明確にしていくものではなかった。

「反米愛国・人民民主主義革命を総括することなく、五一年武装闘争の戦術だけを清算し六全協から第七回大会への宮本の現代修正主義への変質の道を拓いたこと、この変質の要に戦後過渡期世界の分析なしの日本における反米愛国人民民主主義にもとづいた路線によるプロレタリアとその同盟軍の利益を売る中小資本を中心とする資本主義勢力への妥協・屈服・協調が存在し、このことから「敵の出方論」すらも清算した「人民議会主義」の合法議会主義体制が完成していったこと、このことを全然みず、宮本修正主義集団の路線に暴力革命・プロレタリア独裁をつけ加え強調しているのである。

このことは同時に第一次共産主義者同盟に牽引されて創出されていった日本新左翼運動の闘いのこと、戦後革命運動の歴史は五八年から開始されたこと、ブンドは体制間矛盾論に対する不均等発展論・平和共存に対する世界革命・スターリンに対するトロツキー・日帝従属論に対する復活論・民族民主主義革命に対するプロ独社会主義革命・議会主義に対する暴力革命・小ブル日和見主義の合法党に対するプロレタリア前衛党・戦後革命の総括における社会主義革命の欠除としての総括の提起等を対置して、日本共産党に根本的な批判をづきつけ、日本共産党の階級的正体を鮮明に暴いていったのであるが、これらのことを全然みていないものであった。国際共産主義運動において、スターリン問題の総括をめぐって、フルシチョフ式右翼清算主義の現代修正主義が大勢を示し、一方においてはトロツキズムが復権され、このような「左」右の清算主義・日和見主義

に対して中国共産党は「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」や二回にわたる「プロレタリア独裁の歴史的経験について」の方針を打ち出し、スターリン主義をプロレタリアのマルクス・レーニン主義の立場から、実践的・包括的総括をかちとり、このことから中国共産党とソ連共産党の今後の世界革命運動をめぐる路線上の対立に発展せざるを得ず、中ソ論争へと激化してゆかざるを得ない中で、日本共産党指導部はスターリン問題への正しい態度をとったり、自らの戦前革命の正しい思想的政治的総括や戦後革命の総括の方向をりちたせず、そうして六全協や第七回大会があったこと、五一年テーゼに依拠していることの六全協や第七回大回を契機に日本共産党内部において綱領論争がかつてなく活発におこなわれたこと、学生戦線においてこの綱領論争がもっと鋭く展開され、もっとも積極的にとりくまれたこと等を全くみていないものであった。

この第一次共産主義者同盟に牽引されて創出されていった日本新左翼運動についての全くの無知は我々がブンドMLから「警鐘」に乗り移っていったことに由来していると考える。

現代修正主義の日和見主義指導部から自己を区別する為に、宮本集団と訣別し、全然これらの潮流とその歴史とは別個の地平から革命闘争と党建設を推進していこうと五八年結成した第一次共産主義者同盟は六十年安保闘争の敗北の総括——党建設の問題を契機に日本共産党に対するアンチチーゼ的性格を克服し、真にプロレタリア人民を代表するプロレタリア党への飛躍を要求され三分解した。問題の所在を思想問題——党建設の問題、階級基盤の変更の問題として把え、しかし、その立脚点を小ブル革命主義や小ブル日和見主義の体系化である反帝反スタのトロツキズムに求めた戦旗派、この戦旗派と対抗し、ブンドの革命的リアリズムの精神を継承したプロ通と革通、この三分解である。

革通は資本主義の危機の論証や戦略・戦術の獲得の基礎を客観主義的に追求しようとし、経済学の問題に接近していったが六三年の秋から六四年のはじめに宇野ー鈴木ー岩田に立脚しているマル戦と宇野経済学のブルジョア性に直観的に反発し、レーニンの帝国主義論に立脚していくMLに分解していった。我々革命左派の出生は、このMLにみることができるのである。しかし、我々は、一方においてて党建設の問題、階級基盤の変更の問題を把え、労働者になろう・学生をやめて工場へ、という革命的志向を有しながらも右翼日和見主義的にMLを逃亡した部分であったといわなければならないと思う。

②日韓決戦論のMLとその混迷

MLは日米帝国主義の抗争が激化している中で日韓条約をとおしての南朝鮮への侵略は日帝にとっての延命策であると考え、レーニン帝国主義論に立脚しようとしながら、日韓闘争を日韓決戦として闘おうとした。これは経済決定論であり、国家権力との関連を捨象した自動崩壊論であり、一揆主義であるが、当時六四年から六五年にかけてレーニンの帝国主義論に立脚しようとし日韓闘争を革命的に闘おうとしたことは断乎として正しい。

私が大学一年の六三年には、大学の社研に中ソ論争のパンフが中国とソ連大使館から郵送されており、中ソ論争が激化していた。七月には米帝とソ修の部分核停条約が結ばれ、六四年のはじめには仏帝が資本主義国ではじめて社会主義中国との国交回復を実現し、

一〇月には社会主義中国の核実験が成功し、一一月には米原子力潜水鑑が我々の激しい反対にもかかわらず、佐世保と横須賀にはじめて公然と寄港し、六四年から六五年にかけてベトナム戦争が激化し、等々のように戦後過渡期世界における、社会主義――民族解放闘争の前進や米帝とソ修の結託と世界侵略への一層ののりだし等が明らかになる中で、MLはレーニンの帝国主義論に依拠して日帝の復活を強調し、日帝が南朝鮮へ侵略していくのに対し、日本のプロレタリアート人民に、南朝鮮人民との連帯と「加害者意識から被害者意識へ」と訴え、日韓闘争を革命的に闘おうとしたのである。

中ソ論争にたいして、誕生する前からMLに結集する部分は注目し、「帝国主義戦争は不可避でなくなったのかどうか、人類の危機を救うのか、正義の国内戦争か、核兵器に信頼をおくのか、人民大衆を信頼するのか、経済競争の時代か、プロレタリア革命の時代か、構造改良か、暴力革命か。そもそも平和共存と革命はどのような関係にあるのか。権力を既に獲得したプロレタリアートのプロレタリア独裁とは何か、共産主義への建設と世界革命への関連は何か、等々。」これらはみなイロハの問題であって、これはそのまま支配階級への日々の態度に影響する。そしてこのイロハの問題、いわゆる原則上の問題からすれば、はたして中国共産党の立場が正しいということを誰が否定し得よう。それは丁度赤色後進国革命が勝利してゆくことを我々が無条件で期待するのと全く同じ意味において指摘しうることではないか。だから日本のムード左翼がジャーナリズムをにぎわして、〝中国は科学の発達がまだ遅く核兵器の恐ろしさを理解しえないのではないか〟などといったり、日本共産党が、〝ただただ団結を望む〟などという時、彼ら　自らが支配階級と闘う姿勢をみうしない、中国共産党の伝統的な革命的気概さえ既に理解しえないことを自己暴露したのだ。同様の事態はトロツキズム諸潮流の中にも現われている。中ソは同じスターリニズムの硬派、軟派の違いにすぎず、民族共産主義であり、論争はいずれ同じ穴のむじな、袋小路にゆきづまるであろうという見解である。これらの諸君は世界情勢と世界人民の革命運動が今や新しい激流を生み出しつつあることをみることができず、また世界情勢が自らと無関係に進行していっても、いっこうにかまわないのであるといい、更に「今変化しつつある中国共産党が中ソ論争において後進国革命を中心とする国際革命への追求に向っていることに注目せねばならない。かかる情況に於いてさえ、日共はブルジョア評論家的立場から〝中ソの特殊条件〟に起因する論争として国際論争、あるいは国際革命への路線確立に妨害を加えていることは全く反革命的である」「現在共産主義者のとるべき態度は次のごときものでなければならない。中共・カストロ・ゲバラの国際共産主義の分派闘争を公然と支持すること、後進資本主義国の革命闘争を支援すること、そして更に先進国の革命、世界革命戦争への道を切り開く理論と組織と闘争を日本資本主義に対置すること、これである」「後進国の革命と中共理論は先進国の革命と理論と結合しなければ革命の発展も理論の発展もあり得ないこと」等いっている。六四年の夏のML社学同の学習会・合宿において、毛沢東の実践論の分科会もあったが、このように、はやくから中ソ論争に注目し、毛沢東思想に注目・評価していくのであった。しかし毛沢東思想をかかげるまでに至っていなかった。

米ソの部分核停条約にたいしては、そのペテンを暴露し糾弾し、社会主義中国の初の核実験にたいしては我々の大部分は積極的賛成

と反対するのは誤まりだとする賛成であったが、大衆運動においては賛成できないという中途半端な部分もあった。米原子力潜水鑑の寄港にたいしては、この阻止闘争を大胆に闘いながらも――それは六〇年安保闘争後、はじめて機動隊は乱闘服を着はじめたものであり、更にはじめて機動隊がデモ隊に公然と警棒をもっておそいかかったものであり、流血の闘いであった――日米両帝国主義の抗争激化を不均等発展の法則から強調し、故に米原子力潜やポラリス潜水鑑は日本に寄港しないと党派性の如くいっており、対米従属下での安保体制に立脚している日米帝国主義の関係は日米両帝国主義の政治的対立に発展するものではなく、国際プロレタリアート対国際ブルジョアシーの世界革命戦争の枠内での帝国主義相互の勢力関係の変化であることをみることができなかったMLの中では大混乱をきたした。　帝国主義論は破算したとばかりに抜けていく部分――それは中国の核実験に大衆運動においては賛成できないという部分であったが、そういう部分があり、あとは日米両帝国主義の抗争激化を強調しながら、日米帝国主義の妥協もあるのだと部分的に手直しを行い、渚帝国主義論を擁護しようとしながらも、渚帝国主義論を検討していこうとした。ベトナム戦争の激化にたいしては米帝の北爆等に対して、少数でもただちに抗議闘争を行なったりし、一方では南ベトナム民族解放戦線を断乎支持していき、アジア革命運動の前進＝労働者貧農の解放闘争の発展の事実を無条件で支持し、このことを宣伝していかなければならないと考えた。

そして我々は日韓決戦をかかげ、日韓闘争を革命的に闘いとろうとしたのである。私の一番よく覚えているのは六四年三月二〇日の金鐘泌来日阻止闘争である。この日は雨が槍のように降る日であり、その中で社青同等青年労働者のデモもあったが、我々は機動隊の阻止線を突破して何とか羽田空港に近づこうとした。しかし、機動隊の壁でもって袋小路にとじこめられたり、一方において個々ばらばらにされ、けちらされ、機動隊においかけまわされたり、中には機動隊に警棒で頭をうたれたりした。この頃は警棒を公然とデモ隊に使うということはなかったが、このように個々ばらばらにされた時には機動隊はこっそりと警棒をつかっていたのである。

この金鐘泌来日阻止闘争が忘れられないのは機動隊の阻止線を突破しようとする我々をよそ目に来日した金鐘泌は自動車でどこかへ向ったであろうが、南朝鮮における梨花女子大の学生を含む学生の、卵をなげつけたり等々の韓日会談反対の闘いの昂まりに対して金鐘泌は急遽南朝鮮へ帰ったことである。このことから、日韓会談ですすめられている季ラインの撤廃は南朝鮮の漁民ばかりでなく、日本の一本釣り等の貧細漁民の生活を撤底して奪うものであること、季ラインの撤廃こそ大洋とか日ろの大漁業企業独占が近代設備を駆使して、漁場をあらしまわるものであり、わがもの顔をするものであることを知っていく中で、日本においても真に日韓闘争を革命的に闘っていかなければならないと思っていたものである。

日本資本主義は五六年神武景気、五八年鍋底不況、六〇年六一年岩戸景気と好況と小恐慌をはさみつつ全般的には好況の中で設備投資につぐ設備投資をくり返しつつ、六五年の過剰生産恐慌の発現に至るまで高度成長を実現していった。この高度成長期の中で戦後労働運動の戦闘性は抑えこまれ、この敗北の上に労運働全体の右傾化が六〇年代には進行していった。この労働運動の右傾化の影にかくれて、一方において下層労働者の中でも最底辺を構成する窮民的労

働者階層が各都市に滞留し、これ等貧窮と全くの無権利状態の労働者に寄生するブルジョア、小ブルジョア層を持ってスラム街が拡大し、国内植民地と呼ぶことのできるこのスラム地区に資本主義の全ゆる災禍・矛盾が凝集していったのであるが、六四年、四・一七ストの中止にみられる如く、六〇年代は日本労働運動の一番右傾化した時期であったのであり、小ブルジョア学生層に基盤をおいた我々の日韓闘争は、日本資本主義の高度成長の相対的安定の体制を打ち破ることはできなかった。

このような中で、我々は日韓闘争をなんとか大衆的戦闘的に闘い抜こうとし、六四年の夏、東京学生会議を提起し、又八・一五反帝平和集会の準備をし、街頭での署名・カンパ活動を連日行い、この集会を大衆的にかちとっていこうとした。東京学生会議は教室に針と糸を備えようとか、手洗に花を飾ろうとかの学生の要求でもないものを学生の唯一の要求の如くいい、学生の闘いをおしこめている宮本修正主義集団にたいして真に学生の要求を戦闘的・大衆的に闘おうというものであり、この闘いを日韓闘争と結合していこうというものであった。

八・一五反帝平和集会は「第三期論」に対するものであったと考えられる。すなわち六四年八月のはじめ「第三期論」を中心に関西でML以外の新左翼が――当時は未だ革マルも結集して反帝統一戦線形成に向け集会を開いたのであるが、MLは参加せず、八・一五反帝平和集会に向け街頭への呼びかけをしていたのである。

「第三期論」といわれる政治路線は関西ブンドが六二年大管法闘争を戦闘的に闘い、全共闘の先駆のような大学占拠闘争を展開し、全全国の学生運動を索引し、六三年新政暴法闘争等を闘い、六三年に日本資本主義の第一次高度成長＝強蓄積の限界と、第二次高度成長＝国際的国内的蓄積構造の転換と国家権力の反動化、総評・原水禁・全学連の市民的統一戦線の崩壊と労働者・学生の中での反帝闘争の昂まりをいち早く指摘し、全国ブンドの再建・労働者政治組織＝「労研」の拡大・反帝全学連の再建等の全体的政治路線を打ち出していったものである。そして東京のブンド系左翼を統合し、学生戦線を統合し、学生戦線・労働者戦線全般における反帝統一戦線を結成する主張を行っていったのである。

このようなブンド系 左翼の統合と、日韓決戦をかかげるMLは別個だったのであり、このような統合の傾向があればある程、MLは独自に日韓闘争を闘おうとし、東京学生会議や八・一五反帝平和集会等々を大衆的にかちとろうとして行くのであった。関西ブンドの路線 の下に六三年、六四年、六五年とブンド再建と反帝統一戦線形成の努力がなされていき、六四年には都学連が再建され、三月二五日には全国自治会代表者会議がもたれていったが、この都連再建はMLにとっては大管法都学連・今井都学連の破算であったし、全国自治会代表者会議は日韓決戦を訴えるものであった。六五年に関西ブンド・独立社学同・マル戦、そして東京ブンドの「中間派」いくかの労働戦線の部分が合同し、統一ブンドが再建されていった。この中に六四年秋から冬に渚帝国主義論は破算したとMLを抜けていった労働戦線と学生戦線の部分が加わっている。この統一ブンドは六五年日韓闘争を戦闘的に闘い、中核や青解と共に六六年、いわゆる三派全学連を再建していった。この統一ブンドはのちに再建ブンドといわれるものである。MLはこの統一ブンドに対し野合といい別個にあったが、渚帝国主義論はそのままであったし、東京学生

会議は開店休業状態であり、八・一五反帝平和集会は失敗といってよい状態だったし混迷を深めていった。しかし、ともかく日韓闘争を闘おうと、六五年十一月調印阻止を、十二月批准阻止、椎名訪韓阻止を闘おうとした。この間の混迷の貫徹は、日韓闘争の際中、社会党によって提起された反戦青年委員会運動に対して統一ブンドは、これを利用しつつ地区党を建設し、労働運動への介入を強めたのにたいし、MLは最初のうち、傍観していたことである。

十二月椎名訪韓阻止闘争のあと、MLはますます混迷を深めていった。ブンドの革命的リアリズムを継承しようとした点、宇野経済学のブルジョア性に反発し、レーニンの帝国主義論に立脚しようとした点、反スタ・トロツキズムの潮流の影響が大きい新左翼の中で、いち早く中ソ論争に注目し、毛沢東思想を日本の革命と理論に結合していこうとする志向をもった点、世界情勢と世界の人民の革命運動が今や新しい激流を生み出しつつあることから、かかる世界情勢を自らと密接なものとして把えようとしている点、等々を有していたMLは、にもかかわらず、最後まで日韓闘争を大衆的・戦闘的に闘えず、一方では統一ブンドの建設があり、この統一ブンドに対しMLとして明確な態度を示せず、混迷を深めていくのであった。この混迷は六四年からあったが、日韓決戦をかかげていたMLは日韓条約が調印・批准された後、より一層混迷を深め、日韓闘争は敗北したといい、総括しようとしながらできず、大きな敗北感にうちのめされていったのである。これは椎名訪韓阻止闘争、批准阻止闘争のあと「次の闘いは」といい、学生戦線・労働戦線での拡張運動を組織し、反帝統一戦線をうちかためていこうとした統一ブンドと対象的であった。

この混迷の中で六七年の初頭からMLは社会主義中国のプロレタリア文化大革命に注目していくのである。私は大衆組織社学同MLの同盟員であり、MLブンドの同盟員ではなかったが、私の覚えている当時は北京周報を買って熱心に皆で読んだり討論したり、プロレタリア文化大革命について学習会・合宿をしたりしたのである。又、善隣会館の闘いに全力をあげていくようになるのであった。プロレタリア文化大革命を支持することには異議はなくとも、プロレタリア文化大革命や毛沢東思想の評価を明確にもてないでいるまま、私は当時混迷の方が多く、何か日韓決戦からプロレタリア文化大革命にのり移ったようにみえ、よくわからないでいた。そしてその年、学生を終り、労働者になる私にとって労働運動は当然のことであるが、どのように闘っていくのかということが一番の問題意識としてあった。日韓決戦を「総括」しMLとは別個のところで労働運動をすすめていくという警鐘を私は六七年四月頃、知っていった。

③ 警 鐘

警鐘は、日韓決戦の経済決定論の誤りを指摘し、〝革命の問題は権力の問題である〟プロレタリア独裁等を強調し、〝学生をやめて労働者になる〟〝工場に入る〟の下に、労働者階級の独自の組織化・労働者党の建設を追求するサークルであった。又、社会主義下階級闘争・プロレタリア文化大革命を断乎支持し、毛沢東思想をかかげるものであった。

日韓決戦の経済決定論の誤りを指摘し、プロレタリア独裁を強調することは、運動と戦術を重視し、その中から綱領と党を獲得していくより努力していこうという実践的主張とその闘い――五八年来

のブントの闘いを全面清算するものであった。日韓決戦をかかげたのは、プロレタリア独裁の無理解からだといい、プロレタリア独裁を一般的無媒介に、しかも大上段にふりかざし、日本共産党の宮本修正主義化や、日本資本主義の高度成長による相対的安定期に規定された歴史的限界による小ブル学生層に依拠基盤をおき、出発せざるを得なかったブントの闘い、党建設の闘いの限界や欠点をあげ、MLをMLの混迷から逃亡したものとしてあった。全面清算の右翼日和見主義としてあった。警　鐘は六四年の秋から冬にかけてMLがいなくなり日韓闘争を最後まで闘わなかった者が中枢であり、ML内で公然と党内闘争・党派闘争をすることを一切しないものであったが、このことこそMLの混迷からの逃亡、全面清算の右翼日和見主義をあますところなく示しているものであった。公然と党内闘争・党派闘争をしないのは、警鐘の存在を政治警察に知らせないためだといっていたが、政治警察からかくれひそんでいたといっていいほどのものであった。

警鐘はMLの混迷から生まれたものである。私自身、社会主義下階級闘争、プロレタリア文化大革命を断乎支持し、毛沢東思想をかかげた点や、労働階級の独自の組織化と労働者党を追求するという点から、そして何よりも右翼日和見主義による日韓決戦の全否定と、この全否定を合理化する〝革命の根本問題は権力の問題である〟プロレタリア独裁の断片的な命題の下に、MLの混迷から逃亡したといわねばならない。警鐘は日韓闘争を戦闘的大衆的に闘おうとしたことを否定し、六〇年安保闘争を否定し、一方戦後から二・一ストまでの革命的高揚に、日本においても革命的情勢はあったと注目し又宮本修正主義集団の争議団の「闘い」に注目していったのである。

戦後から二・一ストまでの革命的高揚にプロレタリア独裁を加えれば、又宮本修正主義集団の争議団の「闘い」の成果はみな選挙闘争・議会主義にもっていくから駄目だが、争議団の闘いにプロレタリア独裁をもちこめばいいのだというものであった。だから、未組織の労働者を組織しようと組合作りや、争議団のみが全てになっていった。当時、学生をやめて労働者になるということは革命的気概に満ちたものであったと考えるが、その力がそれまでのブントの闘いを否定し、組合作りや争議団のみに注がれていくのであった。

これは正しい「資本主義批判と党活動」の下に生産点で革命的政治闘争を展開するというものではなく、個別資本にたいする改良的要求闘争ー経済闘争によって労働者を組織しようというものであった。それ故、警鐘は日韓闘争が戦闘的大衆的に闘えなかったことから、レーニン全集の中からプロレタリアート独裁をひっぱり出し、政治闘争を否定し、労働者の経済闘争にのみ、のめりこんでいこうとしたものであったといわなければならない。この労働者の経済闘争にプロレタリア独裁をもちこめばいいという図式主義でもあった。資本主義の根底的・全面的批判を行い、生産点で革命的政治闘争を闘うという志向はほとんどなく、ともかく争議団であった。争議団が全てであった。

日韓闘争を戦闘的大衆的に闘えなかったことから、あわてふためき労働者の経済闘争の延長に激しい権力闘争があるのだという幻想の下に、この経済闘争を主張していくことは右翼日和見主義ではなくてなんであろうか。更に、このことは日本資本主義の再建・復活・高度成長の中で、日本共産党が現代修正主義化し、総評――この闘わざる大組織といわれる如く労働運動が右傾化し、政治闘争も経

済闘争も真にたたかわず、名目的な賃上げの経済闘争のみが主張され、日本独占資本が常用労働者を搾取・収奪し、労働過程の変革に見合って機械の付属物化し、その労働条件を保証せず、職業病や労働災害等を強い、合理化を強要するのに対し闘わず、一方、名目的な賃上げの闘いは、臨時工・社外工・出稼ぎ農民・季節工・中小企業の未組織労働者・窮民層等、在日アジア人や被差別部落民が組みこまれた下層労働者がきりすてられ、このような中で小ブル学生層に依拠して「大衆運動でもって労働者階級を組織し、党を作る」方式で闘わざるを得なかった五八年からの第一次共産主義者同盟に牽引された日本新左翼運動のことを、全体的にみていなかったからだと考える。だから宮本修正主義集団が中小企業の未組織労働者を争議団に組織しているのをみて、この争議団にプロレタリア独裁をつけくわえた上で、全く同じように争議団に労働者を組織しようとしたのである。

ここに暴力革命・プロレタリア独裁を強調するのか、議会主義なのかの点で宮本修正主義集団とのちがいを主張し、思想・綱領上の相違点をみていず、「敵の出方論」「二つの可能性論」から宮本修正主義集団を評価する側面が存在していたことをみることができる。パリ・コンミューン、ソヴエト、解放区のように、争議団は日本におけるプロレタリア独裁の具体化であると、争議団の形態を天までもちもちあげたのである。

日韓決戦を否定したことは、宮本修正主義集団を評価するところまでたどりついたのである。事実、宮本修正主義集団にプロレタリア独裁をつけくわえ、宮本修正主義集団を二つにわるという発想は、一時的にしろあったのであり、現在においては革命的三原則が存在していると六一年綱領を支持している、毛派の山口県委員会はこれである。

まとめれば、警鐘は、日韓決戦を否定し、五八年以降のブントの闘いを全面清算するものであったこと、プロレタリア独裁を強調し、これが宮本修正主義集団とブントの双方と我々との革命的相異であると「主張」し、このことから思想・政治上の曖昧さをそのままにし、思想・政治上におけるプロレタリア自己解放の原則的立場を獲得しようとせずにいたこと、反戦青年委員会の新しい誕生があるにもかかわらず、これに背を向け、争議団を評価したために、労働者階級の独自の組織化、労働者党の建設をいいながら、実際には労働者の経済闘争のみを主張し、それさえ十分に闘えないでいたこと、社会主義下階級闘争・プロレタリア文化大革命を断乎支持し、毛沢東思想をかかげたが、五八年以降の日本新左翼運動を全面清算していたこと等々から、毛沢東思想を日本革命へ正しく適用することが出来ず、毛沢東教条主義であり、プロレタリア文化大革命、中ソ論争、日共内党内闘争、党派党争に規定され発生した小ブル的な毛沢東思想啓蒙団体的性格をもつ諸毛派の潮流に合流していく性格をもっていたこと等であった。

毛沢東教条主義について特にいえば、当時現代修正主義批判としての国際共産主義運動の総路線に主に依拠しており、ロシア革命以降の過渡期世界――それはロシア革命の成功によってマルクス・レーニン主義が全世界のプロレタリア人民の階級闘争の武器となり、帝国主義の物質的基礎とマルクス・レーニン主義の主観的条件が融合し、階級闘争の攻撃的段階が創生されたこと、この創生は二〇年代においてはロシアを根拠地として、コミンテルンの創設と、全ゆ

る国に共産党が建設されたとか、プロレタリア独裁の無理解とか、あげながら、しかし結局は戦後から二・一ストにいたる革命的高揚にただただのみこまれており、戦後の日本共産党の総括も皆無であった。又、当時は二・一ストに注目していたのであり、五一年綱領には注目していず、だから評価していなかった。

④警鐘と日本資本主義の高度成長と婦人解放運動

なお、あと一つ警鐘につけ加えておきたいことは、婦人解放運動のことである。

今から思えば、この婦人解放運動をいったのは何も警鐘がはじめてではなく、その前からMLの渚氏はいっており、それは六四年頃からである。又、私自身も女であることから、学生運動を行うと同時に婦人解放と婦人解放運動に関心をよせたし、多くの婦人を日韓闘争に結集したいと思っていた。階級闘争の歴史以前から、女は支配・抑圧されてきていたことに表われていること。一方、国際帝国主義はソ連共産党とコミンテルンを内外から変質させる為に、又国際プロレタリアートの攻勢を鎮圧するために、ソ連と国際プロレタリアートの恒常際国際的反革命包囲体制と国内国家独占資本主義体制となし崩しファシズム体制をしいたこと、そうした中で三〇年代、四〇年代にスターリン主義が生成したこと、このスターリン主義は、のちにフルシチョフによって修正主義に質的に転化されたものであること、等に規定される過渡期世界における中国革命と毛沢東思想の歴史的思想的位置づけができず、プロレタリア文化大革命を支持することでもって毛沢東思想を評価していくものあった。従ってスターリン主義を知ろうとせず、スターリンにたいする批判的姿勢は皆無になり、同様にコミンテルン支部としてあった戦前の日本共産党の批判的総括ができず、講座派の止揚とは何なのか示せず、戦後革命の総括については、解放軍規定だったことを知り、又、婦人の参加なくして社会主義革命はありえず、社会主義革命なくして婦人解放はないことを知っていき、婦人解放の志を大きくもったものである。我々広汎な女がプロレタリア社会主義革命に積極的に参加し、婦人解放と帝国主義も資本主義も搾取制度も存在しない新しい世界をかちとっていこうと考えていたのである。

朝鮮戦争の特需ブームを契機に、対米従属下での安保体制に立脚した米帝からの借金政策によって資本蓄積の金融的基礎をつくりだした日本資本主義は、五五年――六〇年にかけての高度成長と、資本自由化と国際市場侵出をもっての新しい強蓄積の条件をととのえ、この何よりもベトナム特需を最大限に利用した日帝の第二次高度成長を実現していったが、この高度成長の最大の基盤をなしたのは、労働者の低賃金であり、そのメカニズムは顕在的潜在的な過剰人口を構造的に創り出すことであった。この為に、国家権力は農民の八〇%を農業だけでは生活を保てない貧農以下とした程の零細農耕制の存続と、三割農政といわれる国家による下層農民の放逐政策を基礎にしていた。又、搾取率のよい若年労働力を重視して中高年令層をスクラップ化し、更に一層産業予備軍の効能を汲み出すべく、この高度成長期は、社会に遊休している婦人労働力や高年令層、「身障者」を本工の$\frac{1}{2}$か$\frac{1}{3}$の低賃金でもって職業婦人、パート、内職、その他で労働過程に動員し搾取したのである。高度成長期において婦人は、低賃金の男子労働者より更に低賃金でもって労働過程へ圧倒的進出させられたのである。これは婦人をプロレタリアートとして

目覚めさせ、プロレタリア共産主義革命と結合する、プロレタリア的階級的婦人解放運動を発展させる基盤を大きく、ゆるがすことのできぬものとして創り出していったものである。

父が工場労働者であった私は、このことを目の当りにしている。中学生から高校生にかけての六〇年前後から、私の家のまわりの家庭婦人は、ほとんどの人が工場に勤めはじめ、労働過程に進出していった。朝、学校へ急ぐ私などと同じように、それまで家庭にいた近くのおばさんの通勤に急ぐ姿をみかけるようになったし、近くの工場の門へかけこむ姿も沢山みかけるようになったのである。母もこの頃に看護婦として婦人労働者になっていった。それまで看護婦は全寮制の下にあり、家庭婦人は看護婦をやめなければならなかったが、六〇年を前後して、家庭婦人を看護婦として大巾にくみこんでいったのである。それは全寮制の下にある看護婦と違って、家庭婦人の看護婦は労働組合に入れない、等という高度成長を背景にした臨時工・社外工・出稼ぎ農民・季節工・中小企業の未組織労働者・窮民層等、下層労働者をきり捨てたところの組合主義ともいうものが、一方において画策されており、婦人労働者の無権利的賃金奴隷の状態が形成されていったものでもある。急激に家庭婦人が労働過程にくみこまれていったのであるが、それは神武景気・岩戸景気と大独占本位のあおりたてによって、電気洗濯機、電気釜、テレビ等様々なものが「生活必需品」として強制されていく中で、夫のみの収入によっては生活が保てず、それまで家庭内職等々をしていたが、それでも保障しきれなくなったところの低賃金の労働者の妻達であった。

五五年以来、国内市場の開拓を対象にして、成長に成長を続けてきた日本資本主義が、国内市場面での限界に逢着し、過剰生産恐慌をひきおこした六四・六五年の過剰生産恐慌は、中小企業の倒産や山陽特殊鋼や山一証券の破産や、独占の生産調整等の事態となったが、この時には証券会社等に、いわゆるOLとして勤めた友達などがかなり首を切られたし、又女子学生亡国論や女子薬学生入学制限等々がいわれだし、女子学生の就職が研究部内等からしめだされ、系統的に回転率の速い低賃金の賃金労働者へとくみこまれていったのをみている。

このように二回の高度成長期をとおって、日本資本主義は二〇―二四歳をピークとする十五―二九までの若年婦人労働者と、四〇―四四才をピークとする三五―五四歳までの高年婦人労働者を労働過程にくみこんだのである。これはこれ以上単純な労働はないという迄に単純な労働を強いられ、合理化攻撃とともに非常に高い搾取をされていくものであった。六九年における経験だが、スイッチ製造の工場へほんの少し勤め、検査というベルトコンベヤーの仕事をした時、組み立てと同じ部屋であったが、そこは十五―二九歳までの婦人と、パートの高年の婦人と、内職をその工場内で行う、やはり高年の婦人というように、ほとんど婦人であった。そこではZD攻撃がなされ、ある時一つのベルトコンベヤーの統括をしている班長と呼ばれる若い男の労働者が、ベルトコンベアーがあまり速いと反発し、このベルトコンベヤーをとめてしまったことがある位のひどさであった。アメリカから日本電機が六五年にはじめてとり入れたというZDを、この工場は日本電機の指導の下に六六年にとり入れたというもので、肉体的精神的に体力の極限まで酷使するものであった。私はこの中で金属の破片が瞳にささるというZD合理化攻撃

からの被害をうけたが、組合幹部ー宮本修正主義集団がやってきて、ともかく労災にしないといいわたされたことがある。この工場の組合は宮本修正主義団が牛耳り、合理化攻撃を工場の資本家と共にすすめ、自ら労災扱いなどしないように努め、他の工場よりほんの少し賃金をうわのせさせる「賃上げ闘争」だけをしていたのである。当時二五歳の私は、本給二万八千円（？）であり、手取り二万三〜四千円だった。これは他の同じような工場より二千円位多かった。合理化攻撃がふきまくり、労災という労働者の権利まで奪われている中での、他より二千円多い賃金であった。従って非常に高い搾取をなされるままであったが、婦人の賃金は二五歳以上は頭打ちであった。一日で工場用手袋がボロきれの如くボロボロになるまでベルトコンベヤーの流れ作業を強いられているのに、二五歳以上は、女は頭打ちとは、当時二五歳であった私は非常な怒りをもったものである。肉体的　精神的に体力の極限まで酷使されるといったが、これを私が経験した言葉でいうと、ベルトコンベヤーをはなれて手洗いにいき、あの手洗いの小さな箱に入った時フゥーとはじめて息ができるというものである。だから私は、手洗いにいくと、いつも手早く用をすませ、あとはあの箱の壁によりかかって目をつぶって休養するのが習慣になったものである。工場に勤める前までは、手洗いの壁など何となくきたなく思っていたのに、そんなことなど全く気にならず、目をつぶって二〜三分休養するのが楽しみになっていたのである。

単純なベルトコンベヤーの流れ作業、ＺＤ労災の権利まで奪われている無権利状態、二五歳以上は頭打ち　……そして更に差別されているパート　――このパートはたかだか出勤時間が一時間おくれるだけで、あとは全く同じであったが、このパートや工場内で行う内職の高年の婦人労働者の実状をみて、婦人が急速に労働過程にくみこまれていきながらも、婦人の経済的政治的社会的解放の実体とは想像をこえるへだたりが作りあげられ、婦人差別の上での婦人労働者の進出であること、女は自分の労働力を売った賃金で、食べ、着、住むことができない賃金労働者であることを言葉でなく身にしみて知ったのである。しかし工場の婦人労働者はたくましくたのもしい。女性週刊誌でふりまかれているような「甘い」「楽しい」結婚を夢みていないし、シンデレラ姫など考えていない。皆黙々と働き、適当にさぼり、ずーと婦人労働者として生きていくことをそのままうけとめており、学生出身の私から見れば、労働者として腰がすわっているのであった。まだまだ感性的認識であったが、そして労働苦階級苦を学んでいく第一歩であったのだが、このことを実感してから、私は工場労働者の父や母を労働者として理解できる気持になったものである。

以上のように、六〇年前後から労働過程に大量に婦人労働者が進出させられることによって婦人をプロレタリアートとして目覚めさせ、プロ共産主義革命と結合するプロレタリア的な階級的婦人解放運動の基盤と発展させる基盤が創り出されていったのである。このような中で私も婦人解放や婦人解放運動に関心をよせたし、学習会を行ったり、運動の模索を行っている。又、ＭＬの渚氏も、依拠基盤が小ブル学生層であることを克服しようという志向をもっていたためか、婦人解放運動の必要をいっていた。しかし、ＭＬで婦人解放運動の第一歩を具体的に歩むということはなかった。そして私などは、プロレタリア社会主義革命をいうＭＬや新左翼が婦人解放や

婦人解放運動に関心をよせないと不満をもっていただけである。だから〝学生をやめて労働者に〟〝工場へ〟というのと共に、婦人解放運動を具体的に進めていくという警鐘は、それ自体私にとって魅力的であり、正しいことのように思えた。しかし、その内実は、炭婦協などをイメージし、この争議団をさえ婦人の闘いであり、このような闘いを組織しようとし、このような闘いを婦人解放運動だとしたものである。あとは、警鐘の人々が婦人解放の思想をかちとっていくということで、警鐘の中で婦人解放という言葉がよく使われていた。

六七年晩秋の川島氏の南部批判――これは日帝自立論批判であり、反米愛国路線をうちたて、神奈川の毛派と合流していく具体的第一歩のものであるが、この南部批判は、争議団は国内の反動化と最もよく闘うものであるが、争議団を全ての闘いにしたそれまでの傾向を、反戦の運動の必要等をあげ批判し、同時に婦人の闘いも争議団をささえる婦人の闘いばかりでなく、婦人の独自の要求に基づく闘いがあるとしたものであり、争議団をささえる婦人の闘い＝婦人解放運動はのちにかわっていったのであるが、炭婦協のイメージをもっての、争議団をささえる婦人の闘いとは、何とアナクロニズムもはなはだしいものであったことだろうか。

これは六〇年前後から、非常に多くの婦人が労働過程にくみこまれて婦人労働者の闘いがおこっていた。そういう日本資本主義の再建・復活・高度成長と全く無関係というか、全くみていないというか，どうしようもないものであったといわねばならないだろう。日本資本主義の高度成長＝強蓄積の時に、この高度成長の分析の下に闘いがとりくまれていないことは致命的である。この高度成長の分析が全くなかったことは、ブンドの闘いの全否定と結びついていたが、そうであるからこそ、ブンドの闘いを全否定して警鐘にのりうつった右翼的日和見主義は資本主義批判を放棄したものだった。少くとも資本主義批判をすすめようという志向を全くもっていないものであったことは明らかである。

又、南部批判により、争議団の婦人の闘いから、婦人の独自の闘いがあると変ったのも、資本主義批判の志向を失っていたことを自己批判するものなのではなく、だから日本資本主義の高度成長の分析をしたものでもなく、若年停年制反対、反戦の闘い等、婦人労働者による闘いがあるという現象からあったものである。現象等をみたのは、それ迄のアナクロニズムもはなはだしいものより正しいものであったが、しかし、相変らず炭婦協のイメージをもっての争議団をささえる婦人の闘いをそのままかかげていたし、だからそれ以上の正しさをもっていない。婦人解放運動を具体的にすすめていこうと、更に、婦人解放とプロレタリア社会主義革命をかちとっていこうと、闘いの喜びをもって警鐘に入った私は、争議団をささえる婦人の闘いにはすぐに疑問に思い不信をもったが、南部批判によって婦人の独自の闘いがあるとされたことによって、この疑問や不信は解消していくものであった。私自身、資本主義批判が欠落し、日本資本主義批判を具体的にかちとろうという志向がなかったことを自己批判しなければならない。私は、自由、平等、平和という言葉が氾濫する中で子供時代をすごした。自由、平等、平和という言葉が好きだったしそれを希求した。一方、同じクラスの中で給食費や遠足の費用が「払えない」友達がいること。僻地と都市に教育の差があること、手や足をもぎとられ白い着物を着てアコーディオン等

ひきながら歌をうたい寒い街頭でカンパを「願う」傷夷軍人が沢山いたこと、戦争の焼け跡がそこ　ら中にあったこと、工場の寮の生活の中でレット・パージをうけた家庭の離散・病気等々も身近にみて知っていたこと、死の灰の雨の恐怖、六〇年安保闘争と全学連と機動隊の激突等々から自由、平等、平和でないことを知っていくのは当然だし知っていった。私も又、子供の頃から資本主義の個人的な非科学的・ロマン的な批判をもち、自由、平等、平和でない資本主義に対する憤激をもっていた。私は社学同MLに入ったのもこのことに第一に依拠していたし、それ以上ではなかったのだ。このことが日韓決戦での混迷の中で右翼日和見的に警鐘にのりうつったものだと考えます。又、そうであるが故に、賃金奴隷制や剰余価値等を少し知る中で、自身の小ブル学生であるというのに規定され、「本来商品でない人間が商品化される」という超階級的な小ブル疎外論を私はもっていた。このことは、商品化された人間になりたくないということ、人間が商品化されていることにたいする単純な怒りをもつものであった。このことは労働者の階級苦や労働苦を学ぶことやマルクス・レーニンの資本主義批判を科学的にかちとっていく志向をもつことを意識的になすことができなかったことである。そして連赤・「新党」においても、私は資本主義の個人的な非科学的・ロマン的な批判や小ブル疎外論を根底にもっていたと考えます。「新党」時に要求された資本主義批判に対して、私の非科学的・ロマン的な資本主義批判や小ブル疎外論を代行させ、それ故に英雄史観の下に私などのブルジョア思想や小ブル思想を絶対化しおしつけていったのである。警鐘における婦人解放運動は資本主義批判を欠落させたものであり、超階級的なものにならざるを得ず、それ故婦人運動の基盤はありながらも運動としての前進はなかった。しかし警鐘がデタラメであり運動としての前進がないが故に、一方、婦人運動が新日本婦人の会・宮本修正主義集団に牛耳られ、とりわけブンド・新左翼が否定している如く婦人運動にほとんど関心をもたなかったが故に、我々女は強烈な婦人解放と婦人解放運動の志向をもっていったのである。この志向を現実の女の社会的状態の分析を基礎にして、その経済的解放を基軸にしたマルクス主義的な婦人解放の路線、すなわち賃金奴隷制からの解放――私有財産制の廃絶によってのみ婦人解放の基礎がかちとれることを明確にした路線へたかめる課題を我々はもったのである。

⑤ 六七年のMLと警鐘

ブンドMLの混迷から右翼日和見主義の資本主義批判を欠落させた警鐘へのりうつり、毛沢東思想をかかげたことからお山の大将的気分になりブンドを全面清算したことからは新左翼運動についての全くの無知を招来しているのであるが、だからこそ「新党」の少し前の討論でこのことを反省し、六〇年代の階級闘争の追体験と称したブンドの「総括」を聞く中で、戦旗派もプロ通も革通もごちゃまぜにして新左翼と考えてきた我々革命左派のブンドの闘いの道をみない傲慢さをいやというほど知ったし、ブンド――第二次ブンド――赤軍派の上からの党建設をすすめてきた赤軍派と、ただただ革命的情熱をもち、又毛沢東思想をかかげ六九年からの建軍武闘をすすめ下からの党建設をすすめてきた革命左派を位置づけたし、新党は関西ブンドを軸とする第二次ブンドとML、正しくはMLを逃亡した部分であるが、ともかくMLとの同時相互止揚であり、これはブンドの止揚であると考えた。このことがなかったら我々は新党を語ることはできなかったし、新党を全員でかちとっていこうという我々全員の喜びや力強さを感じることはできなかっただろう。新党がブンドの止揚であることを語った時、誰もがそのことを正しく把えたいといっていたし、その提起を要求し、ワアワアと話していたのであり、だからこそ赤軍派のベースから榛名へ結集する植垣君や行方君達を単一党の最も親しい同志として迎えようとしたのである。今からふりかえってみて親しい同志として迎えようとはしなかったのは我々元指導部だけであった。植垣君と山崎君が榛名にきた時、我々元指導部以外の元革命左派の人々が榛名ベースの入口におり、そこで顔を合わせ、植垣君と山崎君と元革命左派の人々は初対面の人々が多かったのに単一党の同志として交流をしているし、行方君や進藤君や遠山さんが来た時も、我々元指導部以外の元革命左派の人とすぐ輪をつくって交流しているのであった。

我々は新党の地平で、はじめてブンドの止揚を考えることができたが、ブンドの全面清算の警鐘以後のことをもう少しみていくことにする。その前に我々が逃亡したMLのその後のことに少し触れておく。

我々が逃亡したとしても、それはMLの中枢ではなかったし、それ自体はMLにとってどうということはなかったと思う。六七年秋から六八年はじめのML社学同の機関紙「赤光」をみれば、「山崎博昭君を記念する「鮮血を旗に染めて前進せよ」「一〇・二一　反戦国際闘争」「沖縄解放のために」「佐藤訪米阻止闘争総括」「三里塚レポート」「東学館強制執行から一年」「明大闘争に追加処分」「将経国来日阻止の〝よびかけ〟」「東洋大川越移転阻止闘争」、「エンタープライズ寄港阻止闘争の意義」「佐世保からの報告」、「沖縄人民連帯への道」等がのっており、日韓闘争をひきつぎ、闘争を堅持したことがわかるし、又、「南ベトナム解放戦線新政治綱領」「レーニン主義と毛沢東思想」「社会主義社会における階級闘争」等があることから、以前のMLの毛沢東思想や解放戦線の評価をひきつぎより積極的に毛沢東思想を評価しかかげていったのがわかる。彼らは「同志諸君！　我々はマルクス・レーニン主義の旗の下、日本プロレタリア革命を推し進めんとしている。プロレタリア国際主義とプロレタリア革命主義の下に日帝確立局面をプロレタリア革命の準備と階級闘争激化の局面にせんとしている。アジア革命人民と連帯し、日帝打倒を企画し計画しつつ、〝日帝確立の政治攻勢〟を粉砕せんとしている」といっている。「だが、マルクス・レーニン毛沢東主義の旗を掲げるとは一体どういうことなのか？　それは彼らの著作に読みふけることであろうか？　否、勿論我々は学ぶが、その闘争と真随を学ぶものである。又、マルクス・レーニン・毛沢東の言説をあれこれ日本の闘争にあてはめることなのか？　否我々は現代世界資本主義と国際階級闘争をマルクス・レーニン・毛沢東の観点で分析し、マルクス・レーニン・毛沢東主義の原則と戦略で闘いぬくことである。同志諸君！　マルクス・レーニン・毛沢東主義の旗印の下に闘うということは、とりもなおさずプロレタリア世界革命の戦略と観点で闘いぬくことを意味する。そしてその任務を日本革命闘争と階級闘争の中で、生きた具体的な政治的組織的闘争として貫徹してゆくところにこそ、又マルクス・レーニン主義のもう一歩の飛躍の契機があたえられるであろう。全世界的にまきおこるプロレタリア革命人民の実力闘争、帝国主義との熾烈な闘争

の中にしっかりと我々の歴史的任務を位置づけ、貫徹する所にこそ、マルクス・レーニン・毛沢東主義の真の意義があり、又その発展もあるのだ。」と語っている。彼らはマルクス・レーニン主義を固守し、特にその帝国主義に関する観点、国家に関する観点・世界革命に関する観点、革命党に関する観点も守ろうとし、毛沢東思想をかかげ、日韓闘争を革命的・大衆的に闘おうとしたこと、つまりブンドの革命的リアリズムをひきつぎ、一〇・八羽田闘争以来の闘いを革命的・急進的に闘い抜こうとしたのである。

「毛沢東思想とは何か？　それは　不断革命〃の思想であると共に革命的弁証法・唯物史観の思想である。常に歴史の発展の要因を人民の中に、階級闘争の中に、革命の中に見出す〃矛盾〃に依拠したその理論と路線は革命的弁証法の真髄を示している。革命家の弁証法とは、即ち、〃永続革命〃の観点に他ならない。〃不断革命〃に他ならない」「二〇世紀の世界資本主義は帝国主義段階のそれである。それはすでに世界的規模での帝国主義戦争をひき起した。今やそれは、いくつかの帝国主義国とそれに支配され従属する植民地・半植民地に世界資本主義を色分けてしまった。植民地に対する帝国主義の支配が深まり、そして再分割が繰り返される中で、植民地、または半植民地のブルジョア化が進展し、帝国主義、金融独占と人民の対決があらわになり、植民地、半植民地人民のプロレタリア化と賃金労働者の発生を促した。かかる中で、帝国主義国における階級闘争・革命闘争と植民地・半植民地における革命闘争・階級闘争との諸関係がプロレタリア世界革命における役割が問題となってこざるを得なかった。このことは、とりもなおさず、プロレタリア世界革命の理論が一層豊富化され、緻密にされねばならぬことを意味した。帝国主義国と植民地・半植民地・従属国における闘争を一体として、プロレタリア革命闘争へ推し進める理論――この問題は、特にレーニン死後、世界のプロレタリアートに課せられた重大な問題であった。逆にいえば〃後進国〃のプロレタリア革命の道を明らかにし得ない〃革命論〃は帝国主義段階に関する全面的批判としても、プロレタリア世界革命の理論としても、帝国主義段階〃その爛熟と展開〃に対するものとして完全なものとはいえなかったのである。毛沢東理論――それは、マルクス・レーニン主義の帝国主義論をいっそう緻密かつ豊富にしたものであり、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命論を一層緻密かつ豊富にしたものである。そして特に、〃帝国主義論〃と〃国家と革命〃に示されるレーニン主義の立場を断固として毛沢東は擁護してきているのであって、毛沢東理論はマルクス・レーニン主義であると共に一層発展したマルクス・レーニン主義であることは明らかである」と語り、更に、毛沢東思想は、「イ、植民地従属国におけるプロレタリア革命、ロ、プロレタリア革命の軍事戦略、ハ、プロレタリア文化大革命、ニ、毛沢東思想は帝国主義が全面的な崩壊に向い社会主義が全世界的な勝利に向かう時代のマルクス・レーニン主義である」と詳しく把えようとしている彼らは、プロレタリア文化大革命から毛沢東思想を評価し、掲げていった警鐘と異り、六三年頃からいち早く毛沢東思想に注目し、日韓闘争の総括やプロレタリア文化大革命を媒介にしながらも、帝国主義と半植民地・植民地従属国における闘争を一体としてプロレタリア革命闘争へ推し進める理論として毛沢東思想を評価し掲げているのである。これは世界情勢と世界の人民の革命運動が今や新しい激流を生み出しつつあることから、かかる情勢を自

らと密接なものとして把えようとするMLの反映であり、毛沢東教条主義の警鐘と全く異なるものである。しかし、毛沢東思想が過渡期世界＝世界革命戦争の中での封建的半植民地の場所性歴史的段階性に規定されており、三〇年代、四〇年代の三ブロックの世界革命戦争を放棄したスターリン主義に制約されていた世界革命戦争の防禦段階に規定されてその意義と限界性をもっているという世界史的位置規定をしっかり獲得することはできなかった。これは、MLがスターリン主義を避けて通ろうとしたこと。いいかえれば、反スタ・マルクス主義や反スタ・トロッキズムをマルクス・レーニン主義で理論的・科学的に克服しようという目的意識性をもっていなかったことに規定されていると考える。もちろん、スターリン主義に対し警鐘が批判的態度を全くもっていないのとは異っているが、スターリン主義を世界革命戦争の中で正しく位置付け批判するという志向はなかったと考える。従って、彼らMLは、一方で、毛沢東思想を先進国の革命と理論に結合するという志向をもっていながら、警鐘ほどではないにしても、毛沢東主義に溶解せざるを得ない体質をもっていたのである。

更に、日韓闘争を革命的・大衆的に闘おうとしたことを断固擁護しながらも、日韓決戦、すなわち日韓闘争において革命を起こすとしたことに対し、経済決定論や一揆主義的傾向としての単なる反省はできても、それ以上ではなく、総括は十・八羽田闘争以来の闘いの革命化・急進化の中で、中途半端で終ってしまったのではないかと考える。日韓決戦の総括から資本主義批判と過渡期世界論を獲得できなかったし、だから掲げた毛沢東思想をもって毛派ブンドとしてブンド内の党派闘争を貫徹していくことができなかったのである。

いりまでもなく、MLは非実践的な毛沢東啓蒙団体的な、いわゆる、毛派の潮流に分流していくことはなかった。だからこそ労働者解放戦線・学生解放戦線のかつてない程の大衆的結集をかちとったし、七〇年六月までの革命的・急進的な闘いを闘いとったのである。しかし、同時に、七〇年安保大会戦に向けて全人民武装を掲げ、武装闘争の志向をもちながらも、建軍武装闘争への道へ進めず、七〇年安保大会戦の終焉の中で、爆取攻撃の中で、無媒介・一般的な整風運動にのり移っていき、整風運動に関するところの毛沢東語録主義の毛沢東教条主義に溶解し　ノンセクト化してしまったのである。

以上のMLに比して、警鐘は全くの毛沢東教条主義を脱するという志向は全くなく、非実践性、毛沢東啓蒙団体的性格の、いわゆる、毛派の潮流に合流していくものであった。これらは当然にも、神奈川左派への結成に進んでいくものであった。神奈川左派は、五一年綱領を支持していったものであり、警鐘の二・一ストの強調と変わっている。これは、なし崩し的な変更であったが、神奈川毛派が五一年綱領を支持していたからである。

六七年の晩秋の南部批判は、日帝自立論の批判であり、この批判は政策阻止革命論、すなわち政策阻止闘争を革命的に闘うことに対する「批判」と結びついたものである。警鐘の右翼日和見主義を整理したものであり、その体系化が日帝自立論批判として結果したのである。

この日帝自立論批判は六八年の初めに「ブンド批判」としてまとめられていったものであるが、これは宮本修正主義集団と構造改革の春日氏との論戦をとりだし、その中で米帝に従属している日本独占資本がアジア侵略へのりだしている、ということを図式主義的に

強調し米帝に従属していることを戦後過渡期世界の中で世界史的に把えるのではなく、一面的、絶対的に把え、日帝の復活を非常に曖昧にしていくものであった。プロレタリア独裁の命題を認め、米帝に従属していることを認め、そして日本独占資本がアジア侵略へのり出していることをいうのであれば、「日帝自立論」を批判せねばならぬことになるものであった。日本資本主義の再建・復活は米帝が国外の資本主義世界全体に二二〇〇余りの軍事施設と軍事基地をもち、世界の憲兵として反革命の輸出を行うということを背景にして経済的にも政治的にも米帝に従属しつつその援助の下で実現していったのであるが、このことに対し日本資本主義は米帝に軍事的・政治的・経済的に従属しているというのである。そんなことをいったら仏帝も英帝も米帝に軍事的・政治的・経済的に日本資本主義と同様従属しているといわねばならないのであるが、そうはいわず、米軍の日本に対する全面軍事占領を特別の如く強調するのである。

現在においては、日本独占資本が独自の「勢力圏」を有していないことを強調することによって仏帝や英帝との「相異」を説明せんとしている。たしかに日本資本主義の再建・復活そのものは、即米帝からの自立、日米間の政治的対立に発展するのではなかったし、対米従属下での安保体制に立脚し、アジアの国際革命勢力に対応する反革命侵略最前線にして大兵站基地として再建・復活されたのであったが、しかし、米帝に対する日帝の不均等発展は五〇年代後半以降激化したのであり、国際プロレタリアート対国際ブルジョアジーの世界革命戦争の枠内での帝国主義相互の勢力関係の変化が進んでいるのである。この後者を日本資本主義の再建・復活そのものが即米帝からの自立、日米間の政治的対立に発展するものでなかったことから否定するか、ないしはほとんどみないのが日帝自立論批判の内容であった。従って、日本資本主義の高度成長などみれるわけがないのだ。

この南部批判を契機にして神奈川毛派との合流の道が急激に開かれていったのであるが、この南部批判について警鐘の中で論義がおこらず、南部批判の直後出された神奈川毛派からの「反米愛国」が南部批判の日帝自立論批判の肯定、受け入れと共にわりとスムーズに全体のものの如くなっていったのである。

日韓決戦の否定――プロレタリア独裁の強調と宮本修正主義集団の「二つの可能性論」への評価――日帝自立論批判となし崩し的になったのであり、これの帰結が「反米愛国」であり神奈川左派の結成であった。南部批判はそれまで争議団とその闘いを主張していたのを批判し、反戦の戦いを加えていったのであったが、これは日帝自立論批判と不可分なものとしてあるのではなく、当時の十・八羽田闘争に大きく影響を受けたものである。

私自身、当時、「反米愛国」というのは非常に恥かしかったー、いやであったが、米帝に従属していることをとらえ、そう言わねばならぬと思うに至っている。このことは、資本主義批判の欠落であり、弁証法的唯物論と史的唯物論の欠落であり、ブンドMLの混迷の中で毛沢東思想を学び過渡期世界論へと前進・飛躍する道と全く遠ざかったものである。同時に、反スタ・マルクス主義、反スタ・トロッキズムへの全面的な反発、小ブルでしかないという「批判」をもっての反発、これをマルクス・レーニン主義でもって深い次元で批判し克服していこうという方向を全くもたない単なる反発としてもあったと考える。だからこそ戦後革命の総括もないまま、二・一

ストから五一年綱領にのり移り「反米愛国」を受けいれていくのであったといえる。

⑥ 神奈川左派と反米愛国路線とMLとの分派闘争

以上のように神奈川左派へと進んだのであるが、私は神奈川左派時代のことを一番よくわからない。神奈川左派結成に向け警鐘を解散する時、正しくは当時、警鐘ではなく〇〇編集委員会であり、これはほとんど警鐘と変わりなかったが、この〇〇編集委員会が解散する時、私は神奈川左派指導下の婦人解放同盟員となったのかよくわからないのである。

神奈川左派の機関誌『人民の星』創刊号における「当面の政治方針と組織方針」をみていくことにする。それは「イ、国際共産主義運動の新しい局面、ロ、日本における情勢と当面の任務、ハ、日本共産党再建の方法」から構成されている。「イ、国際共産主義運動の新しい局面」においては、中国プロレタリア文化大革命、中ソ論争、日共党内闘争　党派闘争に規定され発生した、いわゆる、日本毛派の性格をあますところなく示しており、「現代は帝国主義が全面的に崩壊し、社会主義が全世界的に勝利に向かう時代である」「毛沢東思想は現代最高のマルクス・レーニン主義である」と、ただ強調している。このことから、神奈川左派は毛沢東語録主義の体系をなしたといえる。「ロ、日本における情勢と当面の任務」においては、「日本の当面する革命の主要の敵はアメリカ帝国主義と日本独占資本である。この二つの敵を打倒する民族民主革命を真に実現させる唯一の道は、プロレタリアートを中核とする革命的人民に依拠する民族民主統一戦線の力であり、それは人民民主主義独裁権力の樹立である」と言い、社会主義革命ではなく民族民主革命を打ち出していく。又、「アメリカ帝国主義は日本国内に沖縄をはじめ百数十の軍事基地を設け自衛隊を米極東軍の指揮下におくことにより日本民族を支配し収奪している」と言っているが、これは「基地が日本に幾つどこそこにある」とか、「米帝が自衛隊の軍事指導権を握っている」「沖縄を見よ」「安保条約の　諸条項は反民族的である」などの日米安保条約の現象的事実をあげつつ、日米帝国主義の複合権力を否定し、日米帝国主義の同盟とその優劣関係を「日本の国家権力の構成とその関係」にすりかえ、レーニンの「革命の問題は国家権力の問題である」という革命の正しい――根本問題を日米の軍事的同盟関係に一面化解消していくものになっている。つまり、生産関係――階級関係もない社会関係やイデオロギーなど全く関係ない現象的な日米安保条約関係だけが権力問題だとするものになっている。これは上部構造における革命を否定するものであり、マルクス主義的な革命理論を追求することを否定するものである。又、宮本修正主義集団に対して反中国だとか、米帝と日本独占資本の権力の過大評価とか、ブルジョア議会主義だとかの現象のみをあげるだけで、戦前戦後の日本共産党の総括や日本共産党の死と修正主義化に対する歴史的分析など一言もなく、そのような志向は全くみあたらない。このようなものでは宮本修正主義団に対する闘いは力にならず、その決意だけにとどまるのであるが、正にそうであった。「ハ、日本共産党再建の方法」においては「革命党の真の再建は反帝反修闘争の先頭に立って敢然と闘い、その闘いの中で一人ひとりが自らを革命の対象とみなし老三篇の思想でしっかり武装することによりかちとることができる」と語っている。これは革命

左派の誕生に反対した神奈川左派の主張そのものであり、老三篇をいいながら永久に党再建の方法というのを同じように言い続けるであろうものである。この『人民の星』創刊号における「当面の政治方針と組織方針」は反米愛国路線をはじめて展開したものである。警鐘の日帝自立論批判が反米愛国路線へとなったのであるが、やはりこれは、六六年に日本共産党宮本修正主義集団から造反した神奈川の毛派の主導によるものであり、この時から我々は日本毛派の潮流にはっきりと合流したのである。なお、革命左派は、この「当面の政治方針と組織方針」の「ハ、日本共産党の再建方法」に反対したのであって、「イ、国際共産主義運動の新しい局面」「ロ、日本における情勢と当面の任務」は全く変わりがなく同一である。又、革命左派は、それまでの「ハ、日本共産党の再建方法」に深い自己批判をする志向などはなかったのであり、六九年の国際国内階級闘争の激化の中で「ハ、日本共産党の再建方法」に反対したのである。このことを私は、反米愛国路線プラス実践と表現したのである。

私は婦人解放同盟員だったので、その限りでしかわからないことがあるが、実践的には婦人の活動の上では日中友好協会（正統）の婦人部の人々との連帯・合流をめざしていた。全体的にも、日中友好協会（正統）の人々との連帯・合流をめざし神奈川で起っている基地撤去闘争に参加し、基地撤去闘争を取組んでいこうとしたのである。我々女は、六八年の母親大会・新日本婦人の会に完全に牛耳られた母親大会に日中友好協会（正統）の婦人部の人々と参加していた。そこで「安保粉砕」「沖縄奪還」「基地撤去」「日中友好」「中国の食肉を輸入しより」とスローガンを持ち込み「私たちは北富士・三里塚の婦人のように闘います」「ゲバ棒をもって闘っている学生と共に闘います」と「訴え」たのである。横浜大会では、安保の分科会において我々がかなり一方的にしゃべりまくることで終わり、神奈川大会ではビラをまいたのであるが、新日本婦人の会の人から暴力的にとりかこまれ、全国大会では私は知らないが、マイクの奪い合いになったそうである。このことから、日中友好協会（正統）の婦人部の人々との団結を強め、又、翌年、この母親大会と訣別していく婦人会議等々に一定の影響を与えた。母親大会の後の九月、我々は、日中友好協会（正統）の婦人部の人々と婦人会議の人と共に「反戦平和婦人の会」をつくり基地撤去闘争を闘っていこうとした。この「反戦平和婦人の会」は、戦後直ちに、もう戦争はごめんだ、ということから立ち上った婦人の反戦平和の闘いを組織しようとしたものであるが、従って、原水禁・母親大会等々をイメージしたような傾向をもち、六〇年前後からの婦人労働者の闘いをまず第一に考えるのではなく、多くの婦人を結集しようというものであり、その思想性は小ブル民族主義や小ブル民主主義に帰着するものであった。しかし実際には、全共闘の女子学生や工場の婦人労働者がいくらか結集したのである。

この「反戦平和婦人の会」はMLとの分派闘争に対する態度をめぐって六九年三月に分裂し、日中友好協会（正統）の婦人部の人々や婦人会議の人はぬけていった。MLとの暴力的分派闘争は六八年三月頃から始まった。警鐘はMLの中で公然とした党内闘争を経たものではなかったこと。そして今や神奈川左派として日本毛派の潮流の中に登場したこと等に対しブンド毛派たらんとし、六七年十・八羽田闘争来の革命化・急進化の一担をになう、しかし一方、日本毛派に溶解していく傾向をもったMLが分派闘争を「いどんだ」の

である。MLが日本毛派に溶解していく傾向をもっていたため、ブンド毛派の路線が空語化し、それを対神奈川左派戦、対木下氏戦で排外化せざるをえない弱さをもっており、この分派闘争は

分派闘争の内実をもちえず、暴力的なもののみに終始した。分派闘争を「いどま」れた神奈川左派は大混乱した。様々な行動があったが、分派闘争・理論闘争の内実をいっさい問わない所での暴力的なものは許せない、という小ブル民族主義・小ブル民主主義に帰着する怒りが神奈川左派の共通するものであった。暴力的分派闘争に驚き神奈川左派からぬけていく党員——元神奈川毛派の人々もあった。暴力的なものは許せない、という毛沢東の「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」を教条的にふりまわしたものであり、今から考えると、内部干渉はやめよというものであり、分派闘争・理論闘争をさけるものであった。様々な意見、様々な行動とは、この暴力的分派闘争に対して、いわゆる「話し合い」をしようというものと暴力には暴力をもって応えざるを得ないというもの、そして、この中間で動揺しながら暴力をふるったということから毛派の潮流からMLをたたきだそうという策動を行うものであった。このことは結局、暴力をふるわれたのに対し小ブル民主主義の話し合いを主張することと暴力には暴力という主張の対立になり、これは小ブル穏健主義対小ブル革命主義ともいうべきものであり、神奈川左派から革命左派を誕生させていくものになっている。

私は小ブル革命主義ともいうべき小ブル暴力主義の立場にたち暴力的分派闘争にいどんだことに対して断固としてMLに自己批判を要求するし、この要求を無視するなら暴力をもっても自己批判を要求する、という風に考えていたが、これは分派闘争・理論闘争を消し去ったところのものであり、狭いセクト主義・反米愛国教条主義の一面を強くもっていたところのものである。たとえば、MLが「小便くさい木下派」とか「反米愛国は修正主義だ」と言うのに即自的に反発し、それのみに終始し、毛沢東思想を日本革命の具体的実践に結びつけるということはどういうことなのか深刻に問わず、「反米愛国」をかかげぬ毛沢東思想などない、という風になっているのである。MLとの分派闘争を止揚していくことはブンド毛派の路線をうち固めていくことであり、日韓決戦を革命的に総括していくことであり、このために激しい闘争を行っていくことであったが、非実践性、毛沢東思想啓蒙団体的性格をもち、スターリン主義を擁護し、五一年綱領を評価している神奈川左派にはこの激しい闘争など問題にならず、消耗な暴力的分派闘争の攻防に終始したのみであった。

「反戦平和婦人の会」において、このMLとの暴力的分派闘争をさけて通ることはできなく、日中友好協会（正統）の婦人部の人々等々は、小ブル穏健主義の立場からMLの婦人達と「反戦平和婦人の会」の平和共存を望み小ブル革命主義に反対し、「反戦平和婦人の会」からぬけていったのである。

この小ブル穏健主義と小ブル革命主義ともいうべき対立が六九年の国際国内階級闘争の激化の中で神奈川左派と革命左派の六九年四月分裂へと引き継がれていったのである。だから神奈川左派と革命左派の対立は、日本毛派に規定された上での小ブル穏健主義と小ブル革命主義の対立ともいえるのである。我々も又、小ブル革命主義をうち固める中で小ブル革命主義を止揚する道以外なかったのである。

⑦ 革命左派と「解放の旗」七号

かくて革命左派は日本毛派潮流の小ブル革命主義として誕生したのである。革命左派をになってきた我々の出生は、MLあるいは部分的にマル戦に求めることができるが、以上みてきたごとく、我々はMLやマル戦に規定されるのではなく、MLから逃亡したこと、日本毛派にくみこまれたことに規定されているのである。更に言えば、MLから逃亡したこと、日本毛派の潮流にくみ込まれたことは、ML内の日韓決戦に対する革命的総括が獲得できなかったこと、すなわち、戦後世界における米帝への従属とその下での日本資本主義の再建・復活・高度成長を統一的に把えられず、過渡期世界論――攻撃的階級闘争を獲得できなかったことに規定されていた。

革命左派の総路線を展開した『解放の旗』七号は、反米愛国路線に実力闘争の新左翼の闘いをプラスし、それを「理論化」したものである。新左翼の闘いに対して実践的分岐点と理論的分岐的を全く別々に把える形而上学であった。だから、次のような定式ができ上ったのである。

『現在日本の革命的人民は「安保」体制打破をめざして、これの「個別実体（？）」である米原潜寄港阻止闘争、米タン阻止闘争、米軍基地撤去闘争、沖縄奪還闘争など一連の反米闘争を政治闘争の中心的闘争として〝実力闘争〟〝ゲバルト闘争〟でもって展開している。そして、このことによって宮本現代修正主義とその亜流との政治的・実践的分岐点は明らかに先進的学生の米日反動派に対する〝ゲバルト闘争〟に対する態度、反戦青年委員会のゲバルト闘争に対する態度、赤軍派の武装闘争に対する態度如何になっている。この闘争の先頭にたってこれを指導するのか否か、この闘争の向い側に立って彼らに反対するのか否かが政治的・実践的分岐点となっている。この具体的な革命闘争の実践と切り離すことなく宮本現代修正主義とその亜流との理論的分岐点を求めれば明確に暴力革命・プロレタリア独裁を堅持するか否か、これをマルクス・レーニン主義と修正主義の分水嶺にするか否かということになる。』

といっているが、これは宮本修正主義集団の路線を暴力革命・プロレタリア独裁をもって左翼的ポーズをもって紛飾していく定式である。しかし、同時に、

『更に、我々が反米愛国統一戦線戦術を導入の場合に注意しなければならないことは反米愛国統一線戦戦術は今日の党のように発展する大衆闘争をより大胆に猛烈なものにするためのみ提起するのである、ということである。勇敢に闘っている同志諸君の理論上の弱さにつけ込み「決戦」でないからとか、「東京決戦」ではないからとか、理論上のあれこれを口実にしてこれを右翼的に批判し、実践上の日和見主義を合理化する宮本一味とその亜流のような態度を決してとってはならず、実践の基準に闘いの連帯を深めていかねばならない』

と言い、唯物論の態度をうちたてている。そして、日米帝国主義の侵略政策・戦争政策に対して、何よりも政治ゲリラ闘争を闘うこと、そのことをもって党建設の道を歩むことを打ち出している。

（一九七四・一二・七、未完）

発行　共産主義者同盟赤軍派（ブロ革）
連絡先　東京都板橋区板橋郵便局私書箱19号　燎原社
1975. 10. 5
定価　350円